
仮面ライダーディケイド 第32話 「士」

白翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド 第32話 「土」

【Nコード】

N2144J

【作者名】

白翼

【あらすじ】

雨に打たれている。そう感じたのが全ての始まりだった。

降り続けるそれはまるで何かを訴えかけるかのように止まることはなく。

そして彼はゴミの山に埋もれるように横になっているのだった。

「……………俺は、何なんだ」

それが彼が始めて口にした言葉だった。

これはTV版ディケイド最終話の劇場予告を元に作り上げた、もう一つのライダー大戦の結末である。

始めにこちらをお読みください。

注意

この小説では映画のオールライダーやMOVIE大戦2010のネタを極力使わない方向で、あくまでTV版の最終回から考えられる自分なりのライダー大戦を書いております。

それゆえに、実はあのキャラはあれだったとか、あのセリフはそういう意味だったのかという映画の情報が反映されていません。

そのため原作をこよなく愛する人には、もしかしたら突っ込みどころが生まれるかもしれませんが、それには目をつぶってもらえとありがたいです。

そして私的には映画は両方とも最高でした！！

さって、かたっ 苦しい挨拶でしたけど、初めての人は始めまして、レイジングミラージユぶりの人はお久しぶりです！！

ディケイド好きがこじれにこじれて、気が付いたら二作目となりましたが、皆さまもしよろしかったら、私なりのディケイド32話をよろしく願います！！

それでは今日の分をすぐにでもあげたいと思いますので、タイミングよく速攻でクリックしてくれました読者様は今しばらくお待ちください。

エピソード

その少女は叫ぶことしか出来なかった。

こうなってほしくない。こうなるはずがない。その想いは今だつて変ってはいない。

だが現実には違った。自分がいつも夢で見っていた、最悪な情景を今彼女は目の前にしている。

だからこそ、無力さを象徴するかのようには彼女は叫ぶことしか出来ないのだ。

「デイケイド！」

門矢士に迫りくる9人のライダーたち、その9人に士を倒すことへのためらいはあった。

だがその手を止めようとはしない。彼らには為すべきことがある。全てを救うために、たった1人を倒す覚悟は心の中でつけていたのだから。

だがそんな9人のライダーは、10人目のライダーの登場に安堵の息をつくのだった。

そう、海東大樹は士に銃口を向け、今この瞬間にも引き金を引こうとしているのだから。

「……士」

「……海東」

お互いに変身によるマスク越しのため、表情を窺うことはできない。だからこそ、その心情を窺うことはできなかった。

だが海東だけは違った。自らが銃口を向けたことにより、9人のライダーの動きが止まることを狙っていたのだから。

その一秒にも満たない僅かな時間。彼らの動向を見続けていた剣崎一真がいち早く声を放つ。

「誰でもいい！ デイエンドを止める！！」

その声が届いた瞬間、ディエンドの傍にいたファイズが目にもとまらぬ速さでファイズエッジを振り上げると、そのままディエンドの頭上に振りおろす。

そのスピードはまさに最速。彼の反応速度も、空気を切り裂き接近する武器のどれをとっても、歴戦の勇士に恥じぬ実力がうかがえた。

だがそれを厄介だと思っるのは、あくまで真正面からファイズと戦うと思うものだけだ。

海東は違う。彼は、ガタツクと戦った時も、ラッキークローバーが攻めてきた時も、いつもそうやってしてきたのだから。

『アタックライド インビジブル』

もしくは、大切な何かを失ってしまったかのような。そんな行き場のない怒りの中でユウスケはただ叫び続けているのかもしれない。

「剣崎、あいつはどうするの。彼は『真実』の仮面ライダークウガではない」

「デイクイドと旅をし続け様々な世界を回ったからか、唯一存在がなくならなかった仮面ライダークウガ、小野寺ユウスケか」

剣崎は唯一呼び出すことのできなかつた『真実』の仮面ライダークウガのことを想いながらも、興味がなさげにユウスケから目を離す。

「俺たちの邪魔にならなければそれでいいさ。それに戦力なら俺を含めた八人で十分だからな。いくぞ」

「わかつた。……ん、あの子は」

去り際に渡が目にしたのはボロボロの衣装のままこちらに向かってくる夏海。その姿がドンドンと近づいてくると、彼は剣崎と真っ直ぐに向き合うのだった。

その瞳を見て剣崎は少なからずや驚きを覚える。それはこんな惨状をいきなり一般人が見せつけられ、正気を保っているどころか、何かを決意したような眼差しをしていたからだ。

そして夏海はそんな剣崎の思いに応えるかのように、力強い声をあげるのだった。

「……世界が、世界が壊れるのは土君。いや、ディケイドのせいなんですか」

「ああ、その通りだ。全てのライダーの世界を破壊しようとしているのも、お前の住む世界を破壊しているのもディケイドという存在があるため。あいつを倒さない限り、皆の平和は戻ってこない」

「じゃあ、もしディケイドが死んだら、皆は。……TGクラブや、世界みんなは戻ってきてくれるんですね。真実を教えてください！」

TGクラブ。それは夏海が己の生き方に疑問や退屈を覚えていたときに、支え励まし合ってきた大切な仲間達。

そしてそんな自分たちのために、しっかりと単位をくれた先生。クラブの誰が欠けても、今の夏海はここにいない。それゆえに彼女にとっては本当に大切な仲間だった。

そんな夏海の鬼気迫る声を聞いたからだろうか。剣崎は本当なら答える必要がない、彼女の問いに声を上げるのだった。

「必ず戻ってくる。ディケイドが死ねば全てが元通りになるからな」

その言葉を聞くと夏海の心の中でくすぶっていたものが、決意と一言一つに固まりになる。

友達のこと、世界のこと、今まで回ってきたライダー達のこと。

そして土のこと。その全てを視野に入れ、彼女はゆっくりではあったが、しっかりとした答えをだすのだった。

「……………もう迷いません。私が、私がディケイドを倒します」

それが夏海の出した答えであった。

士と共に旅をしてきた仲間である少女の決意と、友の苦痛の叫び。その二つが上がった瞬間に、それは始まりを告げたのだ。

ライダー大戦

真実のライダー達と

世界の破壊者との戦いが。

第1章「戸惑いのカード 決意の剣」 part 1

深い、ただ深い暗闇に土はいた。

彼は様々な世界を旅し、様々なライダーと共に戦い、様々な笑顔を見てきた。

自分のことが何も分からずとも、自分の世界でなかるうとも、どんなに悪魔と蔑まれようとも、ただ戦い続けてきたのだ。

だが土は今、人も物も何一つ存在していない闇の中にいる。そんな万人なら発狂してしまいそうな黒の牢獄、その中で土はまるでゆりかごで眠る赤ん坊のように安らいだ顔をしていた。

それは当然の結果なのかもしれない。

どんなに巡ろうとも、どんなに救ってきても自分を受け入れてくれる世界はなかった。

だがこの闇は土本人を受け入れ、そして拒もうとはしないから。

当り前だ。そこには闇しかないのだから、彼を拒むはずがないのだ。

「……俺の旅は何だったんだ」

そう独り言を土はもらす。だがその声に肯定の声はない、そして否定の声もない。

初めからこうしていればよかったのだろうか。受けれてくれる世界など探さずに、ただ自らの殻に籠っていれば少なくとも傷つくことはなかったのだから。

様々な世界で小さな希望を見てしまったから。だからこそ士にはこの大きな絶望を受け止めることができなかったのだ。

そうして士は再び目を閉じる。もう誰にも邪魔をされないように、そのまま深い眠りつこうとしたから。

その時士は自らの右腕に違和感を感じる。真っ暗の世界でどうして自分の姿は見えたが、その違和感の正体を掴むことは士にはできない。

だがそれは当り前のことであつた。

「おい、士！ 士！！」

自分の名前を必死に呼び続ける声に士はスツと目を開く。そして彼の目には海東の姿が映るのだった。

「……海東、ここは」

士は海東から目を逸らすと、右から左へと視線を向けていく。そこにはサビ付いた鉄骨や、壊れたクレーンのついた機械、転がるタイヤ、それだけ見れば十分だった。

「ここは随分昔に破棄された工場だ。少し郊外から外れていて人目につかないのが売りだね。……ここなら大丈夫だ」

そうなぜか皮肉気に『大丈夫』だと声に出す海東。土は彼が握り続けていた手を無理やり外すと、あえてその挑発に乗ってやることにした。

「大丈夫って、どういう意味で言ってるんだ」

「それは土の思うように解釈すればいいさ。郊外から離れているから、なかなか敵に見つかりにくいと考えてもいいし」

まるで人を小馬鹿にするかのように声を上げる海東は、そこで一度口を紡ぐ。そして次の一声と同時に土に真っ直ぐな真剣な顔つきを向けるのだった。

「ここなら敵が来ても一般人を巻き込む心配はない。籠城するほど頑丈な作りじゃないけど、屋根があるだけマシかな」

「……あの剣崎一直ってやつと戦う気なのか」

「だ・か・ら、土次第だと言っててるだろ。別に僕はどっちだっていいんだよ。君が逃げたいなら、僕のディエンドライバーの力でさっさと別の世界に逃げたっていいんだよ」

そう言いながら海東はクルクルとディエンドライバーを回す。だが土はそんな彼の姿を見ると、自らの怒りのまま彼の胸倉をつかむのだった。

「お前は何を考えてる。聞いたはずだ、俺は世界を滅ぼす仮面ライ

ダーデイケイド。そんな奴を庇ってまで、あの9人と戦おうなんていつものお前らしくないな」

それは土でなくとも思うこと。海東は土を助けたときのようになり、自らが不利になったり利益がなくなりすればいち早く逃げてしまう人間だ。

それがいきなり土を庇い、自らの損得を考えずに加勢する。それが土には理解できないのだ。

だが海東は違う。突然胸倉を掴んだ土に驚きこそしていたが、土の質問自体には何の迷いも抱いていないのだから。

「いきなり何を言い出すかと思えば。……土は僕の趣味は知ってるよね」

「コソ泥することだろ。だったらなおさらだ。俺はお前がこれから盗もうとしているお宝を世界ごと破壊しようとしている。だったら俺を庇う義理なんてないだろう！」

「はっはっはっは、わかってないな土は」

海東は土が取り乱している様を見て、満足げに笑い声を上げる。そして胸倉から土の手を外すと、親指を立て人差指で土を指さし指で銃の形を作るのだった。

「君は世界を全て破壊するんだよね。それはつまり僕が今まで回ってきた世界や、いろいろなお宝をいっぺんに破壊するということ。つまり、君自身がそんな強力な力を持った最高の『お宝』ってことじゃないか」

「……海東」

「それに士の言うように、僕は君を庇う義理なんてないね。だってそんなこと関係なく助け合うのが仲間ってものなんだから」

バンと指で作った銃を放つと、海東は視線を逸らしてしまう。だがそれも仕方のないことだろう。仲間と言言葉は何よりも嫌い、本当の仲間と認め合ったのがアポロガイストと戦い始めた時なのだから。

ようするに、海東は恥ずかしがっているのだ。

だがそれがわかっていても、いやそれがわかっているからこそ士は海東を笑うことはなかった。

誰もいなくなってしまった自分の隣に、一人でも人がいる。それが士にとって何にも代えがたい救いだっただから。

しかしその救いは同時に辛さでもある。それは海東の存在は士に再び小さな光をあたえてしまうから、士は再び歩きださなければいけない理由があるのだから。

だが士がそのことをいま口にすることはなかった。その代わりに、海東に触発されたのか士の口は勝手に声をあげるのだった。

「……ありがとうな海東」

「よせよ、気持ち悪い」

お互いにらしくないかと、むず痒くなりながら頭を搔く。そして士は自らの歩く道の方向だけは決めるのだった。

「……まだ、俺自身どうしていいのかわかってない。俺は全てを破壊する者だと言われ、仮面ライダーキバに変身する奴には全てのライダーを破壊しなかったことが最大の過ちだと言われた。なぜ、俺がそうしなければいけないのか、その答えを俺はまだ知らない」

「それじゃあ士」

「戦う覚悟も死ぬ覚悟もまだ俺は中途半端だ。だが俺はこの世界から逃げない、逃げ続けて結局全てを破壊するなら、俺は自身がどうなるうとも立ち向かってやる」

そう意気込む士を見て、海東は内心胸を撫で下ろす。それは士には伝えていなかったが、もう世界の融合は後に引けないところまで来ているということが関係している。

士が回ってきた全ての世界のライダーが消えたように、ディエンドの世界が消えてしまえば海東本人が消えてしまいかもしれないという懸念。

もしかした士と最後まで連れ添ってやれないという可能性がある今、ただ逃げ続けるより少しでも早く解決に向けて歩き出すほうが、海東にとっては有意義なのは確かなのだから。

だがそんなことを億尾に出すこともなく、海東は自らの手を土に伸ばす。何をするにしても、まずは動きださなければ始まらない、そう思った矢先だった。

士と海東を祝福する人間がもう一人現れたのは。

どうでもいいと言わんばかりの、何の心も込めていない乾いた拍手。そんなことをたった三回だけすると、サングラスをかけたその男は現れるのだった。

第1章「戸惑いのカード 決意の剣」 part 2

「おめでとう世界の破壊者。それじゃあ今度こそ逃げ出さずに死んでくれるんだな」

「……剣崎一真」

まるで今までの会話が終わるまで待つていたかのように、リラックスしたまま近づいてくる剣崎。そしてその足がかなり離れた位置で止まると、海東は舌打ちをするのだった。

「どうしたんだい。何か言いたいことがあるなら、もっと近づけばいいじゃないか」

「お前たちに近づくときは、叩きつぶすときだけだ。お前こそ人の話を聞けなら、隠している銃を降ろせ」

「ふふ、何の事だか」

全てを見透かされていると、海東はゆっくりと銃を降ろす。そして剣崎はそれを感じ取ると、海東から視線を外し、土に目を向けるのだった。

「おい、どうして俺が世界の破壊者なんだ。お前は俺の何を知っているんだ」

「……何を知ってるね。まあ正直に言つとお前自身のこととは何も知らないな」

「なっ、馬鹿にしてるのか！」

「まあ落ち着け、俺は門矢士という存在を知らないだけだ。だが俺は知っている、仮面ライダーディケイドという存在が周りにどのような影響を与えるかだけだ」

「……仮面ライダーディケイドの存在が与える影響」

その言葉を聞いて、士はピタリと動きを止める。そしてそんな士を見ると、剣崎はゆっくりとサングラスを外していくのだった。

「……そうだな、少し昔話をしよう。その昔、一人の仮面ライダーがいた。その仮面ライダーはただ人々を救いたい、その一心で戦い続けていた。時には仲間裏切られ、何を信じていいか迷い。そんな間に何度も、何度も悩み続けた」

そんなふう突然昔話を始める剣崎に士は不思議な目を向けている。だがそれは何もその物語を話している意味がわからないからではない。

ただ、ただその昔話を口にする剣崎の目が、寂しく何かを必死に求めて続けている。そんな必死な思いが伝わってきたからだ。

「その男は全てを救うことと、友を救うことの二択を迫られた。そして選んだんだ。愛する者を全て助けるために、自ら愛する者から離れていこうと。だがな、そんなことが無駄だということとその男は知ってしまったんだよ」

慈愛の眼差しが憎しみに満ちた眼差しに変わると、その勢いに士は呑み込まれてしまう。気が付く頃には、剣崎一真という男の圧力

に彼の手は震え始めているのだった。

「俺が必死になって救ってきた人達、俺の大切な人が生き続ける世界が壊されようとしている。それもたった一人の男のせいだ！」

「それが、仮面ライダーディケイド……」

「ああ、その通りだ。お前と言う存在がこの世に生まれた瞬間に、世界は徐々に壊れ始めてしまったんだ」

そう力強く言い切る剣崎。だが海東は土を庇うように前に出ると、その視線を剣崎にぶつけるのだった。

「それはおかしいんじゃないか。なぜそんなことが言いきれる」

「それが一番理解がいく答えだからだ。その証拠に、ディケイドが回った偽りの世界のライダー達はもうすでに消滅している」

偽り。その言葉を聞いた瞬間に土は海東をどかすと勢いよく前に立つ。

「あいつらは偽りなんかじゃない！ちゃんと存在したれっきとした仮面ライダーだ！」

「……そうだな、確かに偽りという言葉で片付けるのは失礼かもしれない。だがそうだとしても、俺と俺たちの仲間が真実のライダーだということに変わりはない。その証拠に俺達8人のライダーは未だ消えずに済んでいるのだからな。まあ真実から零れおちた可能性よりも、真実が残るのも当り前の話だがな」

「だったらユウスケはどう説明する。俺が回ってきたライダーの世界が全て偽りなら、あいつはどうしてここにいる！」

「あのクウガは特別なんだよ。真実のクウガから零れおちた小野寺ユウスケと言う存在は、本当は他の偽りのライダー同様一つの世界に留まるはずのだった。だが小野寺ユウスケはお前と旅をし、常にお前の近くにいた。多くの世界に干渉したからか、それともディケイドの近くにいたからかはわからない。だが彼は真実のクウガが持ち得なかった全く新しいライジングアルティメットというフォームを手に入れる可能性ができてしまった」

「……ライジングアルティメット」

「小野寺ユウスケはその瞬間に真実から零れ落ちた存在ではなくなり、唯一の存在になった。だからこそ今は消滅をすることがない。だがな」

そこで剣崎は一度言葉を止めると、土をあざ笑うかのように顔を歪めるのだった。

「零れおちた存在であったほうが幸せだったのかもしれない。そうでなければ、あいつは力の暴走に取り込まれることはなかったんだからな」

そう剣崎が口にした瞬間、土の頭の中には自分に襲いかかってきたアルティメット状態のユウスケの姿がフラッシュバックする。

全ての人々の笑顔を見るための赤き瞳は黒く染まり、全ての困難に真正面からぶつかっていく彼の精神は、ただの破壊衝動に変わってしまった。

浮かびあがるユウスケの笑顔。あの皆に勇気と元気を与えてくれる笑顔が士を苦しませることになるうとは、きつと誰も思っていない。なかつただろう。

よろめきそうになる士を海東が支える。そしてその瞬間に、剣崎は一步、また一步と士達に近づいてくるのだった。

「確かに俺の話していることは、可能性の話だ。デイケイドの通った後の世界は歪み、親しいものを変質させる。正直に言えば、あくまでお前を倒すのは、世界の崩壊を止められる可能性の一つの話にしかすぎない。それでも」

『ターンアップ』

ブレイド特有の変身音が上がる瞬間に、通常形態を通り越して剣崎はキングフォームへと姿を変えていく。

その手にはキングラウザーが構えられており、その剣は今まで幾度となく士に襲いかかっていた。だからこそ、士は違和感を感じたのかもしれない。

士を殺すつもりで戦いを挑んでいる相手だからこそ。明確な理由を持って士を殺そうとしているからこそ。それはおかしかった。

「……どうして、手が震えてるんだ」

そう士が声をあげた瞬間に、剣崎はピタリと足を止める。だがその代わりと言わんばかりに、彼は剣を振りかぶると小さく声を上げるのだった。

「　　つてるだろ」

ただ真っ直ぐに剣崎が振りおろしたキングラウザーが、圧倒的な突風となり土達に襲いかかる。

初めこそ、工場の柱に捕まり何とか耐えようとした土と海東だが、変身前の状態でそれが叶うわけもなく、周りの廃棄物と同様に外に叩きだされてしまう。

「　　ぐっ、がっ！」

なす術なく地面に叩きつけられた土だが、体に外傷はない。それは二人が吹き飛ばされた海の砂浜のおかげであろう。

土と海東はお互いのドライバーを構えると、剣崎を睨みつける。だがその剣崎と言えば、未だにゆっくりと歩いているだけであった。

そこで土と海東は現状がおかしいことに気づくのだった。それは今自分たちがこうして生きているということ、ただ剣を振るだけであのような力があるキングフォームなら可能だったはずだ。

「あいつが本気を出したら僕たちの変身前に殺せははずだ。でもだつたら」

「……ああ、そういうことらしいな」

ようやく砂浜まで辿り着く剣崎。その姿はキングの名にふさわしい雄々しい姿だった。その剣は正義を貫くにふさわしい力強い剣だった。

そして彼の顔は仮面ライダーと名前が表すように、表情は全て覆われている。

だがどんなに強固な鎧を身に纏おうとも。どんなに鋭い剣を構えようとも。

彼は剣崎一真という一人の人間に変わりはないのだ。

「決まってるだろう。俺だって、俺だってな」

だからこそ、その声は泣いていたのだろう。

「俺だって誰かを犠牲にして全てを救うなんて間違ってるってわかってる！ そんなのとつくの昔からわかってるんだよ！！ でもそれしか方法が浮かばないんだ。もしかしたら他の可能性が、もしかしたら皆が笑顔のまままで終われる未来があるかもしれない。ずっと悩み続けたさ！！でももう時間がないんだ、このままじゃ皆の笑顔が全てなくなってしまうんだ！！」

まるで泣き叫ぶように声を荒げる剣崎、そしてその剣はゆっくりと土に向けられていくのだった。

「だから俺はディケイドを殺す！ 全てを生かすための犠牲は俺の手で！！」

そう言い放つと、剣崎は先ほどまでの鈍さが嘘のように、ドンドンと二人に近づいていく。このままではまずいと、海東はディエンドライバーを構えるが、その直前に土を肩を叩くのだった。

「悩むのは後だよ。あくまであいつの言ってることは可能性の一つだ。それが完全な答えじゃない」

「……だが俺は」

「士……！」

「……くそおおおおおおおおおお……！」

士はベルトを腰に巻くと、一枚のカードを取り出す。その絵柄は士にとっては一番見慣れたもの、そして全ての者が破壊者と呼ぶ『ディケイド』が映し出されていた。

「「変身……！」」

『カメンライド ディケイド』 『カメンライド ディエンド』

空中に現れた装甲が士と海東を包み込むと、仮面に黒い線が入り込み二人は変身を終える。そして士はライドブツカーをソードモードにする、そのまま剣崎に向かい走り出すのだった。

「来い、ディケイド！ 俺が……俺の手で……！」

「ウオオオオオオオオオオオオ……！」

大きく振りかぶったお互いの剣は、ぶつかり合うと同時に大きな火花を上げる。

そしてライダー大戦という名の『殺し合い』の第二ステージの火ぶたは、いま切って落とされるのだった。

第1章「戸惑いのカード 決意の剣」 part 2（後書き）

はい、そんな感じでおはこんばんにちは、白翼^{はくよく}です。

何とか二週間以内にあげるといふ約束を守ることができたことにホッとしていると同時に、あげてしまったらもうその文章は変えることができないという緊張に、タイプしている手が震えています。

正直見直しなどはしようと思えばいくらでもしたいですし、修正だつていくらでも出来ると思います。

ですがそれでは始まらないことはよくわかっていきますので、こんな

中途半端な時間ながら連載を始めさせてもらいました!!

といますか、本当にタイピングする手が震えてうまく文章がうちこめていません。

といわけで、あまり多くは書かずに最後にちよろつと

今回は注意書きに書いたように、私なりのライダー大戦となっております。こんな小説をアップしただけで、ガチガチの男の文章ですが、どうぞよろしく願います。

あと、ご意見ご感想などがありましたら大、大、大募集していますので、そんな厚かましい私でした!!

それでは次の更新でお会いしましょう。

では、ノシ

HP

イノセントウイングス

<http://sky.geocities.jp/hakuyokun123/index.html>

第2章「その先の未来を信じて」 part 1

ぶつかり合う剣と剣。その速度は、万人の目からすればきつと同じように見えたのだろう。だが結果だけを見てしまえば、それは呆気ない幻だったと思うしかないだろう。

「グオオオオオオ！」

キンググラウザーがライドブツカーの刃にぶつかった瞬間に、土の体は勢いよく浮かびあがる。だがそれでも土は自らの武器を離そうとはしなかった。

それは圧倒的斬撃に耐え、次の一步を見据えた故の土の動き。普通に考えれば、その行動は最適であったかもしれない。

だが。

「ハアアアアアアア！」

キングフォームの剣崎には関係ないことである。相手が力で抗おうとするなら、それを超える力で叩きつぶす。それを可能にするのが各ライダーの強化フォームなのだから。

土は武器を離さなかったばかりに、まるで巨大なパチンコから放たれたかのように弾き飛ばされる。そして何の受け身も取ることもできずに、地面に叩き付けられると、ガハツと声を上げる。その瞬間に口の中に鉄の味が染みだした。

だが土はその痛みに声をあげることもなく、すぐに置き上がると

一枚のカードを取り出す。

『アタックライド ブラスト』

そのカードの効果により、士のライドブッカーは複数に分身する。そしてその弾丸は疾風がごとく弾速で剣崎に襲いかかるのだった。

しかし剣崎はその弾を見るや否や、足を止める。その瞬間、士は自分の行動の無意味さを目の当たりにされた。

ブラストの弾丸は確かに剣崎に直撃している。その弾丸に士は今まで何度も助けられてきた。それだけの信頼する威力があるはずなのだ。

だが士は一つ大きな見誤りをしていたのだ。たとえ疾風の速度で相手に届こうとも、目の前の敵が嵐ならそれは呑み込まれるだけなのだから。

「……………それで終わりか」

ブラストの猛攻を受けても傷一つつくことなく、剣崎はゆっくりと剣を振りかざす。またあの突風が来ると、判断した士は瞬時にライドブッカーを通常時に戻すと、一枚のカードを取り出した。

「士！ くそ！！」

初撃で吹き飛ばされた時点で士の劣勢は目に見えている。だからこそ海東は士を援護しに行かなければいけなかった。

士は自分のことを仲間だと言ってくれた。そんな彼が巡り合えた最高のお宝のために、彼は走り出さなければならなかった。

そう思い、そう焦っていたからか、海東の反応はほんの一瞬遅れるのだった。

「なに！」

ディエンドのマスクの擦れ擦れの位置に一陣の漆黒の風が通り過ぎると、その瞬間に彼は本当の意味での戦闘態勢に入る。

それは士のために早く駆け付けるということを諦めたと言う意味での戦闘態勢である。

確かに海東は仲間の士のために、一秒でも早く彼のもとに辿り着かなければなかった。だからこそ、海東が足を止めざる得ないのも仕方がないことだ。

彼の行く手を阻むものもまた、士の大切な仲間なのだから。

「グオオオオオオオオオオオオ！ ディケイド！ ディケイド！！
ディケイド！！！！ ディケイドオオオオオオオオ！！！！」

漆黒のボディーと、漆黒の瞳。そこには既に精神がズタボロに崩

ら弾丸を乱射する。だがその弾丸は先ほど土が剣崎に放ったように、
相手を全く傷つけることなく一見無意味なようにも見えた。

だがそれは海東の狙い通りだった。

「そつだ、こつちにこい」

海東が後ろに大きく跳躍すると、それを追いかけるようにユウス
ケも走り出す。海東は自らを囷にすることで、少しでも土の危険を
減らそうという思想はまんまと成功するのだった。

第2章「その先の未来を信じて」 part 2

『カメンライド カブト』 『アタックライド クロックアップ』

士はカブトに変身すると、すぐにクロックアップを発動する。クロックアップは現実とは違う空間に入り込み、目では確認することができない光速の世界に入り込む力。それはたとえキングフォームの剣崎でも変わらない事実である。

しかし先ほどのブラストの嵐で傷一つつかない剣崎に、攻撃面では劣るカブトで果たして対抗できるか。それを士は考えていた。

だが答えは呆気ないほど簡単に浮かび上がる。答えはNO、カブトの攻撃力ではキングフォームに対抗することは出来ない。

「だからこそだ」

士はクロックアップの世界に入り込んだまま剣崎の背後をとる。そしてその瞬間に、二枚のカードを取り出すのだった。

『カメンライド キバ』 『フォームライド キバドッグ』

光速の世界を抜けた瞬間に、士はドッグハンマーを手に取る。全ライダー中最速のカブト、そして全ライダー中最高峰のキバドッグの力。

その威力をもってすれば、結果は見るまでもないであろう。

いくら最強フォームであるキングだとしても、無敵ということは

絶対にない。だから倒せないまでも、ダメージを負わすことはできる。

そう結果は見るまでもない。だが実際に目にした現実は、土の思い通りにはいかなかった。

ギギギギと金属のぶつかり合う耳障りな音が上がると、そのままキンググラウザーはドツガハンマーに切り込みを入れていく。

「なっ！！」

「……惜しかったな」

「くっ、もう少し早くカードを構えていれば」

「何を言ってるんだ？」

キンググラウザーはドツガハンマーにつけた切り込みから、一気にそれを切り裂いてく。そしてその刃の勢いは止まることなく、土に向かっていくのだった。

「俺が惜しいと言ったのは、お前の戦法じゃない。あのままカブトでいてくれれば、それで終わったという意味だ」

それは何度も地獄を見て、ただ戦い続けてきた剣崎だからこそ辿り着いた境地。彼は見ることにすら叶わないクロックアップの世界を、自らの反射神経と実戦経験の堪だけで圧倒したのだ。

鋭い刃が土の体にぶつかると、まるで初撃の焼きまわしのようには吹き飛ばされる。だがドツガハンマーを切り裂くために減速し

たこと、そしてキバドツカの防御の硬さのために、最悪の事態は防ぐことができた。

だがそれは最悪でないと言うだけで、どうにもできないということに変わりはない。

運よく海に叩きつけられたために即死は避けることは出来た。自らの命があることを認識すると、土はすぐに体を起こす。そして自身のダメージを計算する。

なぜだか体に痛みはない。クロックアップ後の奇襲が駄目なら、十秒と言う制限はあるがファイズアクセルフォームの、連続クリムゾンスマッシュにかけるしか土にはなかった。

「付き合ってもらおうぞ。十秒間だけな」

土はファイズのカードをベルトに差し込む。だがその瞬間に彼は異変に気づくのがあった。いや、正確には異変がないことに気づくのがあった。

「変身、できない」

そんなはずはないと、土はアギトのカードを取り出すと、カードをベルトに差し込む。だがベルトは何も反応を示さない。いや、この場合反応していないのはカードのほうであるというの正しいであろう。

土の持っている9つの世界のライダーのカードが灰色に染まっている姿を見れば、それは誰に言われるまでもなかった。

「何でだ、何でなん、ガハッ」

悲痛の叫びを上げようとした瞬間に、吐血がその邪魔をする。そして自らの意思に関係なくデイケイドの変身が解けると、自身の体を見て笑い声をあげるのだった。

まるで紅い雨に打たれたかのように、服全体にしみ込む血。それは今この瞬間も止まることはなく、海の中にドンドンと広がっていくのだった。

「変身できないのは、お前に力を与えたライダー達の世界が完全に壊れたということだ。それを起こしたのは、誰でもないお前だ」

「俺の、せいだと。俺の……せいなのか……」

「もし救えるのなら始の時のように俺が身代わりになってやりたい。だけど、こうするしか道がないなら。……俺はもう迷わない」

そう剣崎自身の決意をあえて言葉にすると、彼はキンググラウザーから5枚のカードを取り出す。

それは全ての罪を背負い、彼の最高最強の技を放つ覚悟をしたからだ。

『カメンライド ドレイク』 『カメンライド デルタ』 『カメンライド オウジャ』

海東は三人のライダーを同時に呼ぶと、先の二人で嵐のごとく弾幕を放つ。だが万人なら耐えるという考えすら浮かぶ暇もないであろう、圧倒的威力をもってしてもアルティメットクウガはひるむことはなかった。

いや、もしくは今のユウスケはひるむということを知らないのかもしれない。ただ目の前の敵を破壊する、だからこそ彼は何の防衛も取らないのだ。

「グオオオオオオオオオオオオ！」

怒りの咆哮か、それとも悲しみの叫びか。ユウスケは弾幕に対してただ真っ直ぐに向かってくるのだった。

そんなユウスケに合わせてディエンドライダーから呼ばれた王蛇が立ち向かう。接近戦を得意とする王蛇はベノスネーカーの尾を模したベノサーベルでユウスケの頭を叩きつぶす。

そう本気で叩きつぶそうとしたからこそ、王蛇は驚愕するしかなかったのだ。

カウンターと言えるタイミングでその拳は放たれたわけではない。だがその凶悪的な拳は一陣の風となり王蛇の腹部に風穴をあけるのだった。

たかが一撃。だがその致命的一撃で王蛇は再起不能になるとその

ままカードの姿に戻っていく。

「全く、これじゃあ埒が明かないな」

海東はそうぼやくと、さらに二枚のカードを取り出す。

『カメンライド パンチホッパー』 『カメンライド イクサ』

総力戦と言わんばかりに、ライダーを召喚すると二人は弾幕の嵐を盾に先ほどの王蛇のようにユウスケに向かっていく。

パンチホッパーとイクサの拳が再びユウスケの頭部に放たれるが、それは先ほどの光景の焼きまわし。二人のライダーの何倍も重いそれは再び二人の腹部に穴をあけていくのだった。

「……やってくれるよ。でもね」

三人のライダーの攻防を見た海東はユウスケに向かい走り出す。それは何も先ほどのように無謀な攻撃をするためではない、三人のライダーを犠牲にしたことにより、相手の間合いを掴むことができただからだ。

アルティメットと化したユウスケは攻撃に怯むことはなく、その純粋なスピードは他のライダーを完全に圧倒している。距離を取りダッシュをさせないために、海東はつかず離れず、自らの射撃が一番効率よく入る位置まで距離を詰める。

だがその瞬間に、ユウスケは予想外の行動に出る。

「グアアアアアアアアアアアア!!」

警戒してた疾風がときスピードで先ほどまで海東がいた位置まで一気に移動すると、今まで海東と共にひたすらに頭部を狙い撃ちしていたドレイクとデルタはなす術なくカードに戻されていく。

その結果は海東の考えが正しかったと証明されると同時に、完全に援護を失ったことに他ならなかった。

だがもう他にライダーを召喚する時間は海東にはない。いや、カードを装填出来たとしても、一枚が限界であろう。

その瞬間に海東の頭には一枚のカードが思い浮かぶ。それは今まで自らの不利を確信した時にいつも頼ってきた一枚のカード。『インビジブル』のカードである。

確かにそのカードを使えば海東はこの場から脱出できるかもしれない。それは目の前の狂戦士がただ真っ直ぐに相手を壊すことしか頭にないことでよく理解している。

今は一度姿を隠し、自らの召喚カードの総出で出迎える。いくらアルティメットクウガといえども、二桁もの数で押せば倒せるはずだ。

そう、常にクールな今までの海東なら迷わずそう選択したはずだ。だが彼は『インビジブル』と同じく、ずっと自分を支えてきてくれたもう一枚のカードを自らの手に取るとユウスケに向かい銃口を向けた。

「逃げるわけにはいかない。ここで僕が数秒でも姿を消したら、あいつはそのまま土に向かっていく」

兵隊の力もなく、姿を消すこともしない。それは目の前の狂戦士を力を知っているものなら、自殺行為にも思えるだろう。

だが海東だけはそう思っていない。そのための布石はずっと積んできたのだから。

「グオオオオオオオオオオオ！」

黒き疾風が叫びと共に距離を詰める。そして何もなす術もなく海東は首を握りしめられるのだった。

絶体絶命と言う言葉を具現化したような現状、だがそんな状態に追い詰められ、初めて海東は笑顔を見せたのだ。

「ふっ、あっはっは、何だかおかしいな。普段は僕が士の邪魔をして君がそれをサポートしてたけど。……でも今は全く真逆じゃないか」

それは今までの世界で海東とユウスケが歩いてきた道のり。いつも士の隣を歩いてきたユウスケは常に人のために、そして士の力となるべく困難に全て真正面から体当たりをしていた。

そして海東はそんな士の邪魔をし、ただお宝欲しさに動きまわっていた。

そんな対極の位置にいたはずの二人が、今こうしてせめぎ合い、しかもその立ち位置がアベコベなことが海東は面白くてしょうがないのだ。

「なあ、君は全ての人の笑顔を守りたかつたんだろう。確かに土を倒せば、皆が笑顔で過ごしていけるかもしれない。でもその笑顔の中に……土はいないんだよ」

そう諭すように海東は優しい声をかける。だがユウスケの力は弱まるどころか、さらにその力を増す一方である。

もう彼に言葉は通じない。そう判断した瞬間に、海東は手に持っている一枚のカードをディエンドライダーに差し込むのだった。

『ファイナルアタックライド　ディ、ディ、ディ、ディエンド』

それは苦楽を共に過ごしてきた海東の最強の一枚。確かにそれには必殺と呼ぶにふさわしい威力があるかもしれない、だがディエンドの力ではアルティメットクウガを倒すことはできない。

そんなこと海東にだってわかっている。だからこそその積み重ねだったのだから。

ディエンドライダーの銃口を迷うことなくアルティメットクウガの頭に向ける。そこにはいつの間に来たのか、小さくひびが出来ているのだった。

5人のライダーを召喚し、それは全て無駄に終わったかのように見えていた。だがその全てのライダーが確実に一撃ずつアルティメットクウガの頭部にダメージを与え続けていたのだ。

だからこそこの一撃は決まる。いや、土のことを考えれば決めなければならぬのだ。

アルティメットから流れ出す黒きオーラに海東の節々が悲鳴を上げ始める。ライダースーツが故障したのか、足や肩からは爆発が上がるが、それでもその照準を逸らすことはない。

「僕はもう覚悟を決めた。……だから君も覚悟を決めるんだ」

何のためらいもなく引き金は引かれる。そして青き閃光は照準通りクウガを貫いていくのだった。

第2章「その先の未来を信じて」 part 2（後書き）

そんな形で新年一発目の更新になります！

皆さま年明けはどのようにお過ごしでしょうか、白翼はちょっとばかり数奇な運命があり、今日はお出かけしました。

まあそちらのほうはホームペの日記にでも書いておくことにして……

さっそくの感想や評価やお気に入りありがとうございます！！

レイジングミラージュからのお客様がいます、小説を続けているとまた見てくれる人がいるのだなど、大感動していました！

というか、本当にそういったものは励みになります！！

そんな感じで、今日は第二章の更新でした。また次の更新の時から、ホームページのほうでお会いしましょう！！

では〜 ノシ

追記

何か思いつきり、誤字と言つか誤文があつて申し訳ありませんでした。

いや、本当にすみません……

HP

イノセントウイングス

http://skyy.geocities.jp/hakuyo_ku123/index.html

第3章「孤独と絶望の淵で」 part 1

暗い、ただ真っ暗な世界にユウスケはいた。

だがその暗さは土が味わっていた自らを覆い隠す黒とは違う。なぜならユウスケは自分自身の姿すら見ることができないのだから。

アポロガイストの攻撃から土をかばった後の記憶が彼にはなかった。だからどうして何も見ることができないのかと疑問を覚える。

「……ああ、もしかしたら俺死んじゃったのかな」

漠然とだがユウスケはそう理解する。アポロガイストの攻撃で致命傷を負ったことには変わりはないが、それでもこんなに呆気なく自分が死ぬとは思っていなかった。

「でもきつと何も見えないっていうのはそうということなんだろうな。……俺は皆の笑顔を守るって約束したのに」

だがそれでも自らを貶すことはない。それは今まで自らが信じる正義を貫いてきた想いと、最後には友を救うことが出来たという達成感からであるものだ。

残していつてしまった土には悪いが、体が勝手に庇ってしまったのだから仕方がない。

「あねさん、俺頑張りましたよね。もうそっちに行ってもいいですよね」

目には何も映っていないが、何かに導かれるようにユウスケは足を動かす。その時だった頬に違和感を感じたのは。

「あれ、なんで……」

頬に流れるそれをすくい取ると、そのまま口に含む。それは八代が死んだときに流し続けた、涙の味だった。

「何で……人間いつか死ぬ時は来る。確かに蘇れるものなら蘇えりたいけど、俺は人生に何の後悔もしてない」

だが涙は止まらなかった。そうして涙の存在を認識したせいか、今度は心の奥底が悲鳴を上げていく。

辛いのは嫌だ。

悲しいのは嫌だ。

苦しいのは嫌だ。

止めてくれ、止めてくれ、止めてくれ、止めてくれ、止めてくれ、止めてくれ。

目に何も映らない分、心の痛みは手に取るように理解できる。でも何を止めて欲しいのかユウスケには理解できなかった。

だがそれも仕方がないのだろう。彼の目には何も映っていないのだから。

理解しがたい絶望と失望が彼を押しつぶそうとしたその瞬間、一

筋の光が差し込んでくる。

それは黒く染まってしまった瞳から、解放されたということ。

だがユウスケは解放などされたくなかったのかもしれない。

砕けたマスクの片目から覗く世界。その青い世界が海だとユウスケは理解する。だが答えは違っていた。

自らの腕が握りつぶしているのは、青い仮面ライダーディエンドなのだから。

「か、海東さん！」

自分が生きている。そんなことを思う間もなくユウスケは海東から手を離す。そして地面に叩きつけられないように、すぐに膝をつき海東を抱えるのだった。

「はっはっ、ようやく正気に戻ったようだね」

「海東さん、これは、これは俺が……」

答えは聞くまでもないだろう。今まで自らが海東の首を握りしめ

ており、拳はスーツの黒色を塗りつぶすかのように赤く染め上げられているのだから。

もうすでに海東は虫の息であったが、それでもユウスケを正気に戻せたことに達成感すら覚えている。

そう、これが海東の出した答え。自分では土の力になることは出来ない。だがライジングアルティメットという新たな可能性を持っているユウスケなら、あの剣崎とも互角以上に戦えると考えていた。

だから今の自分の姿に何一つ疑問を覚えていない。疑問を覚えるとすれば、それはユウスケを正気に戻せなかった時だけなのだから。

「海東さん！ 海東さん！！」

「……僕はね、ずっと君がうらやましかったのかもしれないな」

「えっ、何を」

「僕は仲間だとか友達とか、そんなの青臭くて一番嫌いな言葉だっと思ってた。でも君は違った、どんなに突き放されようとも、どんなに辛い目に合おうとも、ただ真っ直ぐに生きてきていた」

「そう思っただったら、海東さんも真っ直ぐ生きればいいじゃないですか！ だからお願いです、目を開けてください」

だが海東はユウスケの言葉に応えることはなかった。何も意地悪をしているわけではない、もう彼には目を開ける力すらなかったのだ。

「……僕はここまでだけど、君が土の力になってくれ」

そうユウスケに最後の言葉を投げかけると、海東はその見えない瞳を海に向ける。そしてそこにいるであろう、土に向かって手を伸ばすのだった。

「……土、……死ぬな」

伸ばされた手は誰にも掴まれることなくそのまま地に落ちていく。そしてその時を待っていたかのように、彼の体は小さな光になり空に舞っていくのだった。

「そんな、嘘だ。嘘だ。嘘だ。海東さん!!」

それは嘘なはずがない。

「どうしてこんなことに」

だって皆の笑顔を守るための俺の手は。

彼の光に手を伸ばすが、それは掴むことができず全ては空に消えていってしまう。それは海東大樹という男の今までの生きざまを見ているものからすれば、本当に呆気のない最後であった。

ただ今ある状況が理解できずに、そのままユウスケの思考は止まるはずだった。しかしその行為は頬を流れる液体により妨げられる。それは彼が闇の世界で感じた悲しさを具現化した涙ではない。

口に含まれる液体は透明の塩味ではなく、真っ赤な鉄の味なのだから。

「……嘘だ、嘘だ。どうして俺が……どうして俺の手は」

こんなに真っ赤に染まっているのだろうか。

「うわあああああああああー!!」

自らに光を与えてくれた恩人にかけてしまったこと、その信じがたい絶望の叫びは潰えるという選択肢を持ち合わせてはいなかった。

第3章「孤独と絶望の淵で」 part 2

剣崎は全ての覚悟を決めていた。だからこそ、そのカードをキンググラウザーに装填していくのだった。

『スピード 10』

「これで終わりにしよう……ディケイド」

『スピード ジャック』

「くそ、俺は、俺はいつたい何のために」

士はケータッチを取り出すとすぐに、クウガのボタンを押す。

『スピード クイーン』

だがそのボタンを押したところで音声が上がることにはなかった。それは何もクウガのボタンだけはない。アギト、龍騎、ファイズ、ブレイド、響鬼、カブト、電王、キバ、その全てのボタンが反応を示さない。

それはまるで士を拒絶するかのようになり、ただ無言でい続けるのだった。

『スピード キング』

「何だったんだ、俺の旅は。何なんだよ、俺が死ねば世界が元に戻るなら、だったら」

『スピード エース』

「ハアアアアアアアアア！」

『ロイヤルストレートフラッシュ』

剣崎の叫び、キングラウザーの電子音。その二つが重なり合った瞬間に、五枚のカードが土の前に映し出される。

ロイヤルストレートフラッシュ。それはアポロガイストを倒す前に土が受けたキングフォームの最強必殺。それも先の戦いのように迷いがあるものとは違う。

せめてひと思いに土を殺そうと、慈愛のもとに放たれる全力のパワーだった。

ロイヤルストレートフラッシュの斬撃が土に迫りくる。だが土はそれを避けようとはしない、いやたとえ避けることができても、生身の土ではその余波だけでも十分に事足りるはずだ。

土の迫りくる死そのもの、だが土はそれに目をくれることなく。ただ、自らに問いかけるのだった。

「だったら……だったらどうして俺は存在したんだ。俺の存在はいつたい何なんだよ！」

そんな土の叫び声に応えるかのように、斬撃は海を割り、そしてただ真っ直ぐに直撃するのだった。

まるでガソリンを積んだダンプカーが爆発するような、耳が痛くなるほどの爆音をあげ海が弾けていく。

降りかかる水のしぶきは、まるで今の剣崎の心を表している。そんなふうに見えるほどの、長く、ただ長く水しぶきが彼に降り注ぐのだった。

「……………すまない。ディケイド」

自らの行いが本当に正しかったのか。それだけを考えながら、剣崎は海に背を向ける。

そう、背を向けたからこそその際は生まれたのだ。

「ガハッ」

突然の激痛に顔をしかめると、自らの腹部に目を向ける。その刃には、その巨大な剣には少なからず見覚えがあったのだ。

「ファイナルフォームライドのブレイドだと。……………だがもうディケイドには他のライダーの力を使うことは」

確かに剣崎にとって現状を理解しろというのは酷な話かもしれない。だが、それでも一つのことは気づくべきだったのだ。

そもそも生身である土の体に、ロイヤルストレートフラッシュが命中したところで爆発が起きるわけではない。彼は変身を解いており、ましてやグロンギなどの怪人ではないのだから。

爆散した海の水が全て降り終わると、今まで煙で見えなくなっ

いたその姿がようやく剣崎にも見えてくる。

「……………何だあれは」

海に浮かんでいるのは巨大なバイクのようなものの残骸。よく目をこらさなければきっと誰も気づかないであろう。それはファイナルフォームライドアギトトルネイダーの残骸であった。

そしてその後ろに浮いているのは、見間違えるわけもない。全身が黒く染め上げられていること以外は、何一つ変わらない仮面ライダーデイケイドがそこにいるのだった。

「お前が何で存在してるかだつて？ お前の存在がいったい何なのかだつて??？」

目の前のデイケイドはまるで他人事のように、自らに話しかけていく。だがそれも最初の一言だけで、何が面白いのかデイケイドはただ自らを嘲笑するのだった。

「あつはつはつは、あーっはつはつは、そんなの決まってるだろ。空っぽのお前は皆が言うようにただ世界を破壊するだけの存在。それ以上の価値はない」

心境の変化で納得できないほどの、感情の違いに剣崎は戸惑いを覚える。そして自らの疑問のままに目の前にデイケイドに声をかけるのだった。

「何なんだ。お前は本当に門矢士なのか……………仮面ライダーデイケイドなのか」

「確かに我は仮面ライダーディケイドだ。だが門矢士という木偶人形と同じにしてもらっては困るな」

そう剣崎の言葉に応えると、彼は右手に掴んでいた物体を砂浜に向かつて投げつける。その首に掛けられたピンク色のカメラ、それは見まごうことなき先ほどまで剣崎が戦っていた、門矢士であった。

そして未だ海面上にいるディケイドは右腕をスッと天に掲げる。その瞬間に、何もなかった空にはファイナルフォームライド状態のリユウキドラグレッター、ゼクターカブト、クウガゴウラムが現れるのだった。

「始めまして我の名は司^{つかせ}。我は全ての創造と破壊を司るものだ。そしてさようなら、剣崎一真」

司が右腕を振りおろすと、空で待機していた三つのファイナルフォームライドが剣崎に向かう。

まるで使い捨てと言わんばかりに、自らが砕けることも構わず全開の力で放たれたそれは、地面にぶつかると先ほどのロイヤルストリートフラッシュの倍以上の火力をあげ剣崎に降り注ぐのだった。

はい、そんな感じに物語が動き始めたあたりで、みなさんおはこんばんにちは、白翼です。

今回の第3章では、TV版劇場予告で使われていました、『死ぬな士』というセリフと、結局劇場で何一つ触れなかったもう一人の『ツカサ』の存在を登場させました。

正直いきなりの大役の登場に賛否はあるかもしれないですけど、やはり作品の元のコンセプトがTV最終回の流れを引き継ぎつつ、劇場の予告の映像を使いたかったので、こういう形になりました！！

まあだからといって、予告の全てのシーンを使うかどうかと言われれば………なんですけどね。

そういえば本当に今さらですが、

<http://www.youtube.com/watch?v>

|| LG4B7TXnr90

が私が作品のもとにしている、劇場予告です。

それともう何度言っても言い足りないですけど、お気に入り登録と感想、本当にありがとうございます！！

こちらの感想板や、ホームページのメールのほうから感想などをいただいで、本当に皆さまには活力を与えていただきまして、ありがたい限りです！！

もちろん人様に自分の文章を見てもらっているだけでも、嬉しい限りなのですけどね（笑）

それでは次回の更新か、ホムペの日記のほうでまたお会いしましょう。

では〜 ノシ

HP

イノセントウイングス

http://sky.geocities.jp/hakuyo_ku123/index.html

第4章「立ち向かう真実の頂き」

もしも人が人として生まれることができたのなら、一度はぶつか
るであろうその疑問。

いったい自分はどのようにしてこの世に生を受けたのだろうかとい
う考え。だがその答えは至極簡単、当然自分の母親のお腹から生ま
れてきたと誰もが答えるであろう。

だったら、その母親は誰から生まれてきたと聞かれれば、母親の
母親から、その母親は………そんな考えを続けていくうちに人は
壁にぶち当たるのだ。

一番初めの人間はどのように生まれたのだろうか。いや、この世
界自体がどのように生まれたのかと。

何かがある場所を何も無い場所に来てても、何も無い場所から何
かを生み出すことはできないのだから。

その瞬間、人間は自らがとても空虚な存在ではないかと思ひ始め
てしまう。何もないところから生まれた人類に、中身があるという
こと自体がおかしな考えなのだから。

だがそれを瞬時に否定できる言葉がこの世界にはある。

それは『神』と言う存在。人類が見ることも触れることもできな
いその存在を創造する時、人々は仮初の安堵に包まれる。

だがもし何かの間違えで、その『神』が目の前に現れてしまった

ら？ 仮初が真実だと知った時、人はどういった反応をするのだろうか。

神の存在意義を聞くのだろうか。人を作りだした理由を聞くのだろうか。

……………それとも。

まるで爆心地と言わんばかりに、降り注ぐ武器の嵐。その一撃一撃が、土の使っていたファイナルフォームライドと同等以上の威力を持っており、それは誰が見ても一人に対して放つ火力ではなかった。

司は自らの手を降ろすと、空に漂っていた武器が消えていく。そして彼は荒れ果てた海岸を見ると、チツと舌打ちをするのだった。

「そうか。何も抗おうとしてるのはブレイド一人ではなかったな」

そう口にした瞬間に、一つの電子音が上がる。

爆心地よりはるか遠く、全身傷だらけであるがしつかりと人としての体を残している剣崎、それはあの武器の嵐に襲われたにしたら

まさに奇跡、そしてそれを可能にしたのは。

『ハイパークロックオーバー』

赤きカブトムシのライダー。仮面ライダーカブトは、剣崎から手を離すと、ゆっくりと立ち上がらせるのだった。

「すまない、カブト……」

そう弱々しく剣崎が言葉にすると、彼らの周りにはその他のライダー。そしてエンペラーフォームのキバが彼の隣に立つのだった。

「本当は時間の限り君の決断を見ようと思ったんだけどね。でもあんなのが出てきたら、話は別だ」

「……………ああ」

渡と剣崎を筆頭に、強化フォームのライダー達は空にいる司に目を向ける。

8人の、しかも最終フォームの彼らを前にしてはどんな敵であろうと、たとえ大ショッカーであろうともその圧倒的な存在に恐怖するだろう。

だが司はその存在を、まるでアリの行列を見るかの如く、ただ興味なく見下すのだった。

「8人の仮面ライダーか。多くのライダーの世界を作りだし独自の進化を遂げたものたち」

剣崎はその言葉を聞くと、自らの体を意識を強く保つ。そして司に目を向けるのだった。

「作り出したものだ……、お前は何なんだ」

「我が名は司。世界の破壊者であり、創造主である。先ほども言ったはずだがな」

「それがわからないって言ってるんだ。何が世界の創造主だ！」

「……そうか、我が作り出した分身を倒そうとしていたこと。それを眺めていて、お前たちはこの世界の全てを知っていると思っていたが。……とんだ期待外れか」

そう司が残念そうに声を上げると、彼は人差し指をスツと天に掲げる。その瞬間、砂浜だったはずのこの場所が、黒く星々が煌めく、まるで宇宙から地球を見たような景色に変わるのだった。

「なら、最後の余興にこの世界の仕組みでも話してやろう。この世界に様々な世界があるのは貴様らの知つての通りだ、そしてそれを作りだしたのは我だ」

世界を創造した。誰しもが驚愕せざる得ないその言葉は、真実に對して素っ気なく言葉にされる。

だがそんなことを聞いたからと言って、はいそうですかと納得できるほど、剣崎はまだ目の前の黒きデイケイドの存在を認めてはいなかった。

「な、何をいきなり。そんなことあるはずないだろ！」

「なぜそう言い切れる。必死になって倒そうとしていた仮面ライダーディケイドを、貴様らは世界の破壊者と言っていたはずだ。それなら世界の創造主がいてもおかしい話ではないだろう」

「……それは、だが」

「貴様らが吠えるのもわかる。全てを破壊する者がいるのなら、それを倒せばいいだけのこと。だが世界の創造主がいるなら、それはすなわち自らが作られた存在だと認めなければならいということだ。ああ、かわいそうに。だがそれは変わることはない事実だ」

司は相手を馬鹿にするかのようにオイオイと目を覆って見せる。だがそんなわざとらしさに彼はすぐに飽きると、再び剣崎達に目を向けた。

「だが貴様たちはとても面白かったぞ。我が与えたのはあくまで通常形態の仮面ライダーだけ、しかし貴様たちは独自の進化をし、新しい力を手に入れた。そして決して見ることがないであろう世界の真実に辿り着いたのだからな」

「それが……お前だと言うのか」

「ああ、そうだ。我は生まれつき創造の力を持っていた。だから作り出したのだ、作れる限りの様々な世界を。そしてその世界に作られた者たちの戯れを見るのが、私の趣味でもあった。しかしここで困ったことが一つ生まれてしまった」

そう司が言葉にすると、辺りに浮かんでいた地球が互いを破壊しながら一つに集約する。それは今の世界の現状のほんの少し先を映

したものであつた。

「もう飽きたんだよ。作れるだけ作ったから視聴するのも一苦勞だね。だからこそ、もう世界を一つにしようと思つたんだ。でもその前にな」

パチン。

司が指を鳴らした瞬間に、辺りの景色は真つ黒な世界から、荒れ果てた岩場に変わる。それは夏海がいつも夢に見ていた、ライダー大戦が行われていたあの場所に間違ひなかつた。

「我の手を離れ独自の進化を遂げた貴様たちを叩きつぶしたいと思つてな。何千とある世界でようやく辿りついた8人だからな」

それはまるで、目の前の玩具が気に入らないからと投げ出し壊してしまふ子供のような言い分である。だがそれでも普通ならそれに對し抗議の声はあがらないだろう。

玩具に意思はなく、反抗することも逃げ出すことも出来ないのだから。

だからこそそこにいる8人は意思を固めるのだつた。何も司の前に立ちふさがるものは、意思のない玩具ではない。

たとえ自らが仮初の電池で動いていようとも、彼にはしっかりとした信念と正義が備わっているのだから。

「言いたいことはそれだけか」

「ああ、それだけだ剣崎一真。さあ、貴様達はどうする？」

その言葉に返答するように、剣崎はキンググラウザーを司に向ける。そして他の7人のライダーもすでに決意は固めていた。

「ならお前を倒して世界を取り戻すだけだ」

「取り戻す？ もとから我が作り出したものだ。奪うの間違えじゃないか？」

「ならそれでも構わない。……俺たちは信じた道を行くだけだ」

たとえ司の言うことが真実でも偽りでも関係はない。門矢士を相手にしていた時とは違い、今の8人に迷いはなかった。

だが彼らの威圧とは逆に、司は未だに戦闘態勢にすら入っていない。しかしそれもまた司からすれば当たり前のことなのだ。

電池が入っていようと。意思があろうと。目の前にいるものは玩具に変わりはないのだから。

「……なら全力で抗え、もしかしたら傷の一つくらいつけられるかもしれないぞ」

そう言葉にすると司はゆっくりと右腕を上げる。するとリュウキドラグレッター、ゼクターカブト、クウガゴウラムが。そして左腕を上げるとキバアロー、デンライナー、そして巨大な茜鷹が空に現れる。

「さあ、こい。しばし戯れてやろう」

司の手が振りおろされた瞬間に、ファイナルフォームライドが8人のライダーに向かい放たれる。

それを合図に、真実の者たちによる真実のライダー大戦は幕を開けるのだった。

第4章「立ち向かう真実の頂き」（後書き）

はい、そんな感じでおはこんばんにちは。白翼です。

少し短いですが、第四章はこの一本で終了します。

そして多分次も短い章になり、いよいよ……といった感じです。

さてさて、この4章で司の存在が明らかになりましたが、まあありがちといえはありますが、やはり世界の破壊者の対極をなすものと言えは、世界の創造主！ という形になりました！！

さてさて、アクションらしいアクションがない、この4章と多分5章ですが、出来るだけ5章のほうも早めにアップするように頑張っ
ていきたいと思います。

とりあえず今日更新のホームページの日記で、やる気も上がったこ
とですしw

やっぱりライダーはかっこいいやー

さて、そんなわけで今日はこころへんで失礼します。

でははっ ノシ

HP

イノセントウイングス

<http://sky.geocities.jp/hakuyoku123/index.html>

第5章「本当の笑顔のために」 part 1

ただ、その少女は己が全力で走り続けている。

そのスピードは止まることなく、その表情には憂いの想いと鬼気迫る想いが混濁していた。

ドレス姿から私服に着替えた夏海は、バッグを片手にその場所を目指す。もともと彼女の目的は土のいる場所を知ることであり、真実のライダーに加勢する気など全くないのだから。

いや、全くないというのは間違えかもしれない。ただデイケイドを倒すことにより全てが元に戻るなら、それでも構わないと夏海は思っていた。

だがデイケイドを倒しても、全てが、門矢士という人間は帰ってこない。ただ一点、その真実が今の彼女を突き動かしていた。

しかし居場所がわかって、所詮はライダーの足と人間の足。どんなに頑張っても追いつけるはずがないと焦燥感を覚えながらも、間にあってくれという希望を決して捨てはしなかった。

だが夏海の目の前に広がった光景は、その想いを一撃のもとに砕いていく。

「……何ですか、これは」

辿り着いた海岸には無数のクレーターの跡、そして8人のライダーが向かったはずのその場所には誰もいない。それが意味すること

は。

「……間にあわなかった」

そう全てを悟った瞬間に、夏海はその場で膝をつく。……いや、自分でも膝をつくつもりでいた。

だが海岸に唯一の人を見つけると、彼女はそこに向かって走り出すのだった。

「ユウスケ！」

そう声をかけるがユウスケは何も反応を示さない。確かに体中は汚れているが、その体に何の傷も見えないため、夏海は逆に疑問を覚える。

だが彼女が理解できないのは仕方ないことだ。ユウスケに外傷は一切ないが、その代わりに彼の心は死んでしまったのだから。

抜け殻のようにただ海を眺めるユウスケ、そんな彼の目の前に夏海は立つのだった。

「ユウスケ、いったい何があったんですか！ 土君はどうしたんですか！！」

「……ああ、夏海ちゃんか。土なら8人のライダーと一緒にどこかに連れてかれちゃったよ」

「連れてかれたって、だったらどうしてユウスケはここにいるんですか。早く土君を助けに行かないと」

そう言っただけで夏海はユウスケの手を引く。だが急ぐ夏海に対し、ユウスケは一步もその場から動こうとしなかった。

「駄目なんだよ夏海ちゃん。もう俺は誰かの笑顔のために戦えないんだ」

「……ユウスケ？」

「本当に駄目なんだ。土のピンチだっただけで、頑張っても、力を振り絞ろうと思っても。手に力が入らないんだ、海東さんを握り潰した時から……」

「海東さんを！」

「そうなんだ。俺もどうしてこんなことになったのか、全然覚えてないんだ。でも意識が目覚めた時には俺は海東さんを殺していた」

『殺していた』そう自らの口に出した瞬間に、ユウスケはこみ上げる吐き気から思わず膝をついてしまう。そして握りこぶしすら作ることのできない手で、地面を殴りつけるのだった。

「俺は、俺は海東さんに託されたのに。土の力になってくれと言われたのに！ だけど駄目なんだ、化け物相手ならまだ皆の笑顔のためって自分をごまかすこともできた。だけど、俺は、俺は、その笑顔を奪ってしまったんだ！ 俺はもう誰かの笑顔を守る資格なんてないんだ、だつて……もう俺自身が笑えないんだから」

そう自らの叫びを言葉にすると、彼は地面を殴りつけるのをやめる。そして先ほどまでのようにただボーッと海を見続けるのだった。

「……ユウスケ」

そんな痛々しい彼を見続けることができずに、夏海は目を逸らしてしまふ。だが、そんな彼を放っておけないという彼女の想いが、ゆっくりと彼の体を包み込むのだった。

「……夏海ちゃん」

「ねえ、ユウスケ」

そして彼を包み込んだ右腕がスツと上がる。

「言いたいことはそれだけですか」

そうドスの聞いた声がユウスケの耳に入った瞬間、夏海の親指がゴキリと彼の首に当たる。

「夏海ちゃん、いった何、あっはっはっは、これはっはっはっはっはっはっは」

光家直伝、笑いのツボ。それを押されたユウスケは自らの意識に関係なく、ただひたすらに笑い続けるのだった。

「どうです、まだユウスケは笑えるじゃないですか」

「あっはっはっはっは、いや、そういう意味っはっはっはっは」

シリアスのシーンが、絶望に満ちたユウスケの後悔が、これでは全て台無しだと思っしかないこの状況。

だが始めからそうするつもりだった夏海は、そんなことを気にするはずもなかった。言ってしまうえば、そんなことを気にかけていること自体時間がもつたいないのだから。

夏海は再びツボを押すと、それでユウスケは笑いを止める。そして捲し立てるように夏海は声を上げるのだった。

「私には相手を無理やり笑わせる意外に何の力もありません。ただ皆と旅をしているだけで、帰る場所にしかなくてあげられないんです。でもユウスケには土君を、いえ、皆を笑顔にするための力があるはずです。それに海東さんがユウスケに全てを託したのなら、その時の海東さんはどんな顔をしてましたか。ユウスケを恨んでいるような顔をしてましたか！！」

「……………海東さんの」

海東の死に際。それはユウスケが彼を殺したことを深く後悔しながらも、自らの意識を保つためにずっと心の奥に閉じ込めていた光景である。

しかし先ほどまでユウスケが頭に思い浮かべていたのは、彼を握りつぶした手と真っ赤に染められるスーツの姿だけであった。

だからこそ、海東の顔には靄がかかったように、全く表情が思い出せずにいた。

そう、夏海にそのことを言われるまでは。

「ユウスケは託されたんですよ。私みたいに無理やり相手の笑顔を

作るんじゃない、本当の土君の笑顔を取り戻してくれって!!」

夏海の心の叫びがユウスケに届いた瞬間、その情景がフラッシュバックする。

『……僕はね、ずっと君がうらやましかったのかもしれないな』

そうユウスケに話す海東は。

『僕は仲間だとか友達とか、そんなの青臭くて一番嫌いな言葉だっ
て思ってた。でも君は違った、どんなに突き放されようとも、ど
んなに辛い目に合おうとも、ただ真っ直ぐに生きてきていた』

そう自らの心内をさらけ出す彼の言葉は。

『……僕はここまでだけど、君が土の力になってくれ』

そう全てを託した彼の表情は。

ずっと思いつきさないとようじと思っていたその記憶がユウスケの
頭の中を反すうする。そして彼は海東のその顔を思い出したのだ。

「……おかしいよな、ほんと。だって自分が死ぬっていうのに……
海東さん笑ってたんだ。俺なら安心できるって、本当に笑顔で……。
だけどそれだけじゃ駄目なんだ。海東さんの笑顔は俺なら土の力に
なれるっていう意味の笑顔。まだ俺はその笑顔に慣れてないんだ」

「ユウスケ……」

「行こう夏海ちゃん、土を助けに!」

ユウスケの想いが決意に変わる。そして今までの抜け殻のような顔がまるで嘘かのように、そこには皆を笑顔にすると誓ったいつものユウスケの姿があるのだった。

あら、でも二人には居場所がわからないんじゃない。

二人の耳に届くあまりにも聞きなれた声。その主に二人は視線を向けると、そこには白きコウモリ、キバーラが空を舞っているのだった。

「…………お前」

ユウスケは夏海を庇うように前に立つと、鋭い眼光を向ける。それはアルティメットフォームである時に、ずっと暗闇にいたと思っていた彼の記憶が戻ったのだから当たり前のことだ。

キバーラがユウスケに噛みつかなければ、彼はアルティメットクウガになることも、海東をこの手にかけることもなかったのだから。

「あらあら、随分な態度じゃない。一緒に旅をしてきた仲間なのに」

「だったら、どうしてその仲間を土を襲わせた。土だって、ずっと俺達と旅をしてきた仲間だったはずだ!!」

明らかかな敵意を向けるユウスケ。だがそんな彼をあざ笑うようにキバーラは体を揺らすと、小さく笑い声を上げる。

「ふふふ、だったらユウスケはあのまま死んでしまったほうがよかったの？ 海東が自分の力では助けられないと、あなたの力を信じ

て正気に戻した。どっちにしてもあのまま死んでしまったら、今こ
うして士を助けに行くという選択肢すらなかったのよ」

「……それは、だが俺は」

「ふっふっふ、大丈夫。そんなことで納得できないっていうことは
私もよくわかってるわよ。だって」

キバーラはそこで言葉を切ると、その赤く大きな瞳をスツと閉じ
る。そして自らの背中を見せユウスケから視線を外すと、本当に小
さく声を上げるのだった。

「………私もあなた達のこと、本当の仲間だと思ってたんだから」

儂しげに言葉にするキバーラ。それはいつもユウスケ達が見てい
た、気取っている彼女でも、人をおちよくっている彼女でもない、
本当に初めて見せる姿だった。

そんな彼女を見てユウスケは、ウッと後ずさってしまふ。しかし
そんな彼の代りに、同じ女性である夏海が前に出るのだった。

「だったら、どうして土君を襲おうとしたんですか。仲間だと思っ
てるなら、なおさらです」

「確かに私は光写真館の皆を仲間だと思ってるわ。でも仲間って言
葉はね、愛って言葉には勝てないのよ。特に女の子はね」

「……愛ですか？」

「ええ、だからこそ私はあなた達を裏切った。でもそれももう意味

がなくなっちゃったのよ。門矢士は確かに世界の破壊者には変わりはないけど、それ自体が困だなんて私たちは知らなかったの」

もしかしたら自分たちも。そうキバーラは言葉を続けようとしたが、その口を紡いだ。必要最低限のことはもう説明し終えており、時間が惜しいという想いがドンドンと背中を押していたためだ。

「別に私のことは信じなくてもいいわ。でも士を助けたいと思うなら、後ろについてきなさい。私も早くあの人のところに行かなくちゃいけないからね」

そうキバーラは言葉にすると、もう語ることはないと言葉を飛ばす。そんな彼女の姿をどうしても疑うことのできない、ユウスケと夏海はすぐに互いに頷きあうのだった。

「キバーラだって言ってたじゃないか、俺達とは仲間だって」

「はい、行きましよう士君のもとに」

もう迷うことはないと言った二人はキバーラ追って走り始める。そんな二人の姿を見てキバーラは誰にも聞かえないように声をあげるのだった。

「士には夏海を殺せない理由がある。だからこそ、世界の破壊者を止められるのはあなた一人だったんだけどね。でもよかった……あなたの子が士を手にかける姿なんて見たくなかったもの」

だがそんな考えもすでに過ぎ去ってしまったこと。だからこれが最後になるだろうと、自らの本心をそつと言葉を口にするのだった。

「例え人としての体を持っていなくとも、私と対等であってくれたみんな。こんな素敵な仲間と巡り合えて本当によかった」

そうして決意の翼はさらにその速度を上げ、土のもとに羽ばたいて行くのだった。

第5章「本当の笑顔のために」 part 2

大戦。誰にそう言われるまでもなく、目の前の光景はそう呼ぶにふさわしいものである。

黒いデイケイドと8人のライダーの戦い。もともと岩場だった場所は、まるで始めから平地であったかのように削られ、地面はまるでミサイルでも落とされたかのように巨大な穴をあけ続けている。

だがもし、黒いデイケイドの表情だけを見ているものがいたら、その人物は一つの勘違いをするかもしれない。

それは司の顔があまりにも余裕に満ちており、まるで午後のティータイムに洒落こんでいるかのように優雅なオーラを纏っているからだ。

「どうした、もっと我を楽しませてみる」

司は手を宙に掲げると、それに応え新たなるファイナルフォームライドが現れる。

「ほらほら、手を抜いてやるから避けてみる」

『ファイナルアタックライド ファ、ファ、ファ、ファイズ』

ファイズブラスターから無数に放たれるポイントマーカ。だが歴戦のライダーはそれを回避または叩き落したりと対抗して見せるが、ただ一人そのどちらの反応も出来ずに標的になってしまう。

それは誰でもない。ブレイドブレードにより腹部を貫かれた剣崎であった。

「まずは一人だな」

そうつまらなそうに司は声を上げると、残ったファイズポイントの全てが剣崎に向かう。そして縦横無尽に放たれたその光線は、彼に降りかかる雨のように落ちて行くのだった。

『死』きつとその情景を見た全てのものにその言葉が浮かぶであろう。それは剣崎を含め7人全員が思ったことだ。

ただそれはあくまでその情景を『見た』ものだけが浮かぶ答え。彼のそれは目で追うことすらできないのだから。

『ハイパークロックオーバー』

その音声と共に、光線の嵐の中にいた剣崎の姿が消える。そしてその様子を見て司はチツと舌打ちをするのだった。

「クロックアップを超えた力、ハイパークロックアップか。本当に面倒な力だ……なら、こうしようか」

司が手を挙げた瞬間に、全てのライダーが身構える。それは再びファイナルフォームライドの嵐が迫ってくるということを予期したから。

だが恐れていたそれが現れることは一向にない。その代わりに、そのライダーの体に異変が起きるのだった。

「木偶人形に与えたカードとベルトはもともと我が作ったものだ。あの木偶はそんなものの補助がなければ力を使うことができない。だが我は違う、カードの力などなくともすぐにでも手に入れることができる」

それはシンケンジャーの世界での光景とよく似ていた。あの時は士がブレイドのファイナルフォームライドのカードを使ったことにより、チノマナコの召喚したブレイドを自らの武器にしていた。

だが目の前の司は、自らが言うように何の補助も借りることなく、ハイパーフォームであるカブトを無理やりフォームライドさせたのだ。

「驚くなよ進化したライダー達よ。始めから言っているようにこれは戯れだ。貴様らなど倒そうと思えば一瞬なのだから。さて、それでは私の攻撃と、ハイパーゼクターカブトの攻撃。今度はどこまで耐えきれぬかな」

その瞬間に周りの空気は凍りつく。いや、そう見えたのはハイパーゼクターカブトと化したカブトと司だけである。

『ハイパークロックアップ』の世界では、誰しもがその時を止めてしまうのだから。

そしてその狂気と化した赤き角は、己の意思に従うことなく仲間たちの体を貫いていくのだった。

第5章「本当の笑顔のために」 part 2（後書き）

はい、そんな感じでおはこんばんにちは、白翼です。

前回の予告通り、全力のスピードで上げさせてもらいました!!

お気に入りの登録のほうも少しずつ増えています、本当にありがたいっす。

皆さまの一動作、一動作で更新のほうも楽しくやらせていただいています!!

物語のほうも（作者的に気持ち）後半戦に入りまして、ここからさらに頑張っていきたいと思います。

それではまた近いうちに

『第6章 誕生日プレゼント』

でお会いしましょう。

それでは今日はこんなところで

ではさ　ノシ

HP

イノセントウイングス

<http://skyy.geocities.jp/hakuyo>
[ku123/index.html](http://skyy.geocities.jp/hakuyo)

第6章「誕生日プレゼント」 part 1

「何だよこれ」

キバーラに導いてもらい辿り着いた場所。そんなユウスケ達の目の前に広がるのは惨状『だった』であろう瓦礫の山と、クレーターの数々。

それだけを見ても、ここでどれだけ壮絶な戦いが行われていたかはうかがえる。

だが彼にはそんな光景をうかがうことしか出来ないのだ。実際にここで行われていたのは、戦いでなくただの戯れなのだから。

「……つまらんな」

心の底から先ほどまでの出来事を落胆しながら、黒いディケイドはため息をつく。

色は黒くなっても空にいるのは仮面ライダーディケイド、だがその姿を見てユウスケと夏海は土と司を間違えることはなかった。

なぜなら、二人の知っている彼はまるでその空間だけ切り取られたかのように、そこに倒れているのだから。

「土君！」

二人はすぐに彼のもとに走り出す。だがその行く手を阻むように、巨大な剣『ブレイドブレード』が大地に突き刺さるのだった。

「お前は確か小野寺ユウスケ、仮面ライダークウガか。ここに来ることのできなかつたクウガの代りだ。他のライダー同様我と戯れてもらっぞ」

「他のライダー同様って……そういえば剣崎さんを含めた残りのライダーは」

いやこの状況を見れば聞くまでもないであろう。だがユウスケは口にするしかないのだ、それは今でも信じていけないから。あの仮面ライダーの最終形態である8人がやられてしまっただなんて

だがユウスケの淡い期待は、司の嘲笑と共にあっさり一蹴されてしまうのだった。

「全て壊れてしまったよ。いやいや、あんなにもたないとは思わなくてな。つい力を出しすぎてしまった。それにそんな木偶人形に今さら用はないだろう、あれは我が作り出したもの、その我が目の前に現れた瞬間に、そいつは抜け殻とかしたよ」

「なっ、士に何をしたんだ！」

「だから言ってるであろう。そいつは私の世界創造のために作り出したただの木偶、だが破壊の力だけは与えておいた。本当は巡る世界をその力で破壊してもらい、私の創造の手助けをしてもらおうと思っただがな。まあ記憶はもとからないとしても、破壊衝動は植えつけたはずなのに……うまくはいかないものだな」

「……じゃあやっぱり士は世界の破壊者なんかじゃなかつたんだな」

「いや、世界の破壊者に間違いはないぞ。ただそうなるはずだった存在が、今回はたまたまそうしなかつただけ。世界を破壊する者でなく、世界を破壊する力を持つものもまた破壊者というだけのことだ。まあそんなことよりもだ」

もう説明は疲れたと司が右腕を掲げる。そしてそこには今までのものとは違う巨大な金色の剣が現れる。

「8人のライダーの分析はすでに終わった。せっかく手に入れた力だ、世界の崩壊前に試させてもらうぞ。まずはキングブレイドブレードだ」

「くっ、変身」

ユウスケは自らの腹部に手を添えると、そこにベルトが現れ仮面ライダークウガに変身する。そして隣にいる夏海の肩に手を置くと、彼女を突き放すのだった。

「夏海ちゃん、早く行って!」

「で、でも」

「何かすべきことがあったからここまで来たんだろう。だから早く土のところに行って!」

「……はい」

そう夏海は力強く頷くと、振り返ることなく己が全力で走りだしていく。だが黒いディケイドはそんな彼女には何の興味もないように、むしろ彼女が離れるのを待ってユウスケに話しかけるのだった。

「それではそろそろいいか？　しかし通常フォームのお前一人では何とも物足りないな」

「だったらせいぜい手を抜いてください。託されたんだ、だから俺は倒れるわけにはいかない」

「本当にライダーと言つのは馬鹿の集まりだな。……手を抜かなければ、貴様など即死だぞ」

放たれるキングブレイドブレイド、走り出すクウガ。司の戯れと、ユウスケの守るための戦いは今始まりを告げるのだった。

そしてそんなユウスケを信じて、夏海は土のもとに辿り着く。

「……土君」

目の前にいるのは確かに夏海の知っている土であった。傷ついていない部分を探すほうが困難なほど体は傷ついており、その目は完全に閉じられている。

きつとその心臓に耳を当てても、彼の生きている鼓動は聞こえてこないのだろう。だから夏海はワザワザ絶望を感じるための、それをしようとは思わなかった。

「でも鳴滝さんは言っていました。ディケイドを止められるのは私だけだって。もし私にディケイドを止める何かがあるとすれば、もしかしたら逆に救うことだって出来ると思っんです……」

世界を滅ぼす力があるということは、世界を救う力があるという

こととある種同義語である。そんな世界を破壊すると言われた土
が、全てのライダーを仲間にした奇跡を考えれば、きっと自分にも
できることがある。そう信じて、夏海は土の手を握りこむのだった。

第6章「誕生日プレゼント」 part 2

雨に打たれている。そう感じたのが全ての始まりだった。

空を見上げるとそこには暗雲が立ち込め、まるで人々に何かを訴えかけるかのようにただひたすらに雨を降らし続けている。

次に彼は体を動かしてみようとするが、なぜか体が言うことをきかない。どうしたのかと思い周りを見回してみると何ということはない。自分の体がゴミの山に埋まっていて、それゆえに体がいうことをきかないのだ。

「……………俺は、何なんだ」

こんなゴミの中に蹲っていることが普通の人間のすることだとは思えない。それに大切な何かをこの手に持っていた気がしたのだが、それが何かさえ彼には思い出せなかった。

確かに彼には、使い課せられてた使命があった。だがそれを思い出すことは結局できなかった。

だが彼の心は覚えていた。それは心の奥底から浮かび上がる途方もない破壊衝動が教えてくれていた。

何かが憎いのではない。この目に見える全てが憎かった。

雨が、雲が、ゴミが、そして自分と言う存在が。その全てに嫌悪感を抱かずにはいられず、だからこそこの場から動くことが出来なかった。

全てを破壊したい、その想いが己の心を占めるならそれはどこにいても変わらないということ。この世界そのものが憎いのなら、きっとここに彼の居場所はないのだろう。

「……………だったら、俺の居場所はどこにあるんだ」

何もかも破壊してしまいたい気分であった。目の前の光景が全てなくなってしまうえば、この言いようのない孤独感と嫌悪感は消えるかもしれないと、それだけを思い続けていた。

だがその瞬間に彼は笑い声をあげる。きっとそれは意味がないとこの目に映るものを全て壊したいのなら、それは終わりが無いということ。

いや、もしくはもうすでに終わっていると見えるのかもしれない。

「自分の名前以外記憶がないくせに、目覚めた瞬間全てが終わってるか。……………笑い声もでなくなっちゃったな」

そう言っただけ彼は自らをあざ笑うことをやめると、再び空を見始める。そして決心するのだった、このまま雨に打たれ続けられれば体は冷え、支障をきたさず。そしてそのまま死んでしまおうと。

そして次に目覚めるときは、自分を迎えてくれる温かい世界に辿り着くかもしれない。

そして自らの目をゆっくりと閉じる。いや、正確には閉じようとしたのだ。だがその行動はある男の登場で未遂に終わるのだった。

「なあ、君は何をしてるんだい」

そう声をかける五十代前後の男。だがそんな男に対して彼は同じ言葉を返すのだった。

「あんたこそこんな雨の中、ゴミ山で何をしてるんだよ」

「私か、私はちょっと部品を探しててな。娘の誕生日にやろうと思ってるんだが」

「なんだ、ゴミを娘にやろうっていつのか」

男の表情を見た瞬間に上がり始めた破壊衝動。だが彼はその破壊衝動を人間にはぶつけまいと、ワザとぶっきら棒に応える。

しかし男はそれで気を悪くすることなく、少し困ったように頭を掻くのだった。

「いやいや、プレゼントがちょっとばかし型の古いものでね。どうしても1パーツだけ見つらなくて。だからわざわざこんなゴミ置き場まで……………おお」

そう喜びの声をあげると、彼の倒れている近くのゴミを拾い上げる。

「これだこれだ、いやいや君がここで倒れてくれて助かったよ。こんなゴミ山じゃ普通に探したら、時間がいくらあっても足りないしね」

そう言うと男は今さらと言わんばかりに傘を差し始め、バッグの

中から娘へのプレゼントらしいそれを取り出す。そして嬉々としてその部品を組み込んだ。

「……………カメラか？ でもどうしてレンズが二つあるんだ」

「それは二眼レフだからに決まってるだろう。ほら見てみる、このオシャレな形、女の子向けなピンク色、そして安心の防水加工」

「あんたの娘はカメラが好きなのか」

「少なくとも嫌いではないと思うよ。まあ私がジャーナリストという仕事をしてたから、今はどうだか知らないけど実家は写真館だからね。もう生活の一部といっても過言ではないよ」

「……………そうか」

興味なさげにそう返事をすると、彼は視線をそらしてしまう。だが男はそんな彼を無理やり自分のほうに向かせると、ニイと笑顔を見せた。

「どうした、そんなつまらなそうな顔して」

「つまらないんじゃない。不快なだけなんだ、目に見えるものすべてが」

「ほう、どうしてだい？」

「それがわかればこんなに苦労はしてない。目覚めた瞬間から目に映るものを全てぶっ壊したくてしょうがないんだから、仕方ないだろっ—」

「目に映るものが全てね……だったら、そうだな」

何を考えたのか男は手に持っているそれを押しつける。それは見間違いようもない、あのピンク色の二眼レフカメラである。

そんな男の行動が本当にわからないと、彼は戸惑いの目を向けるのだった。

「だったら君にこれを貸そう。目に映るもの全てを壊したいなら、しばらくそのカメラを君の目にするといい」

「何言ってるんだよ。これは娘へのプレゼントなんだから」

「ああ、だからこそ貸すだけだ。私は君の瞳で世界を見ることはできない、だから本当の意味で君の気持をわかってあげることができないからね。もし君が君の瞳で世界と向き合えるようになったら、それを娘に渡してほしいんだ。よし、そうだ」

何かを思いついたように声をあげると、男はメッセージカードのようなものを取り出す。そして手に持ったボールペンで、そこに書かれた文章に無理やり文字を付け加えるのだった。

始めから書かれていた言葉は『誕生日おめでとう。愛する我が娘にプレゼントを』

そして後に書かれた言葉は『この誕生日プレゼントをしばらく家で預かってほしいんだ。よろしく頼むよ』

男は再びメッセージカードを閉じると、それを彼に渡す。

「……何のつもりだ」

「ここで出会ったのも何かの縁だ。それに全てが憎いならどこにいっても同じだろう、だったらうちでしばらくゆっくりするといい。連絡のほうは私からしておくよ」

「……どうしてあなたは見ず知らずの俺にこんなことをするんだ」

それは彼にとってみれば当然の疑問である。今日初めて出会った男が何の見返りもなく、しかも自らの家に招待してくれるというのだからそう思うのも仕方がないであろう。

だが何の見返りもないということを知った瞬間、彼が思っている時点で、その考えは間違っているのだ。考えた。

「私はジャーナリストという仕事をこなして様々な人の目を見てきた。自らの正義のために頑張っている男の目は輝いて見え、悪徳なことには手を染めている者の目は黒く濁っていた。でも君の目はこの長い年月生きてきた私でも見たことがない。言葉や態度で嘘がつけても、瞳だけは欺くことはできない。だからこそ私は思ったのかも知れないな」

「……何をだ」

「君がこれからレンズ越しに切り取った景色を見て、それを通して様々な人と出会い、上っ面だけでない。心の目で真実を見れるときが来た時。君の目がどのように輝いているか見てみたいんだ」

そう純粹な子供のように輝いた目を向ける男。だが男の言うよう

な日が来るとは彼は思っていなかった。今日の前に広がる憎しみと破壊衝動を抑えられるとは彼は決して思わなかったから。

だが、その心の叫びは自らの考えに背くように言葉になるのだった。

「……………なあ、俺にもそんな真実を見れる日が来るんだろうか」

「この世界に生まれたということは、それだけで君の物語は始まっているんだ。だから今はレンズ越しでもいい、その時が来たら君の……………えっと、そういえば君の名前は何か」

「……………つかさだ。それ以外何も覚えてない」

「つかさか……………うん、だったら」

男は何かを納得したように声をあげると、バッグの中から紙とペンを出す。そしてそこに文字を書いて見せるのだった。

「君の名前は今日から『門矢士』だ。門矢は私の旧姓だけどいいよね」

「別に苗字なんてどうでもいい、それよりもその漢字は何なんだ」

「ああ、これかい。この『士』は『士気』のしの部分の別の読み方でね。士気というのは、戦いに臨む兵士の意気込みとかの他に、集団で事に臨む人々の熱意みたいな意味もあるんだ。これから歩む君の未来には、たくさんの方がいてくれますようにという、ある種の願掛けみたいなものかな」

「……俺の周りにたくさんの人が」

それは彼にとって想像することも許されなかったと思っていた光景。全てを破壊したいと思っっている男には絶対にたどり着けない道だと思っていた。

だけどそれはちょっと前までの話だ。それはそうだろう。絶望の淵にいた土は、男との繋がりができたその瞬間に歩くべき道を見つけることが出来たのだから。

だからもつと多くの人と知り合い、触れ合いたいとさえ思えるようになったのだ。

それは全てを破壊してしまいたい土には、とても困難なこともかもしれない。だけど土は本当の自分を掴むために、歩き続けようと決めたのだ。

男は空様に晴れ渡り始めた土の顔を見て、笑みをこぼす。そして土の名前を書いたメモ帳に、自らの住所を書くとそのを彼に渡すのだった。

「じゃあこれが私の家の住所だ。写真館だから近くまで行けばすぐにわかるはずだ」

男はそういうとすぐに土に背を向けてしまう。それは男なりの土に対する気遣いであり、立ち上がるなら自分の足で立ち上がれという想いの表れであった。

だが土にもその想いは伝わっており、彼は自分の足でしっかりと立ち上がると、最後に男に問いかけるのだった。

「なあ、あなたの娘の名前は」

その言葉を聞くと、男は思い出したように手を叩く。そしてメッセーカードにつけ足しておいてくれと始めにいうと、こっつ答えるのだった。

「娘の名前は光夏海だ。……それじゃあまたな、土」

そうして彼は振り返ることなく歩き去ってしまつ。そしてその背中が見えなくなると、土もまた歩き始めるのだった。

本当の自分自身に出会うために。

第7章「土」 part 1

「でも駄目だったんだ」

あの時と同じ、ゴミ山の中で土は懐かしい夢を見ていた。

全ての始まり、カメラとの出会い、人との触れ合い。

忘れるはずがない、何度も忘れようと思ったが忘れられなかったあの始まりの日。

あの日があったからこそ、土は自分と向き合おうと思えた。全てを破壊したいという衝動を抑え、たとえレンズ越しでも世界と向き合おうと思えたのだ。

だからこそ、始めは不器用でも人を助けようと思った。誰かと触れ合うのはどうしようもなく恐ろしかったがそれでも頑張ってきたのだ。

「でも俺は結局この場所に帰ってきたんだな。何もなすことなく」

なら今度こそその目を閉じてしまおうと思った。このまま冷たい雨に打たれながら、息絶えてしまおうと思った。

だがまたもその行動は妨害されてしまうのだった。それは見間違えるはずもない、あの時と同じ男によるものだった。

「また会ったね、土」

「……………ああ、そうか。ようやくわかった、ここはそういうところなのか」

士が辺りを見回し全てを納得したように声をあげる。そんな彼を見て、男もまたそれを肯定するのだった。

「まあそういうことだ。ここはあの世とこの世の境目の世界。まああの時の君は死にかけたたってことなんだよ。そして私は取材中に内戦に巻き込まれて死が確定していた」

「どつりであんたのことを夏海達に話しても信じてもらえないわけだ。正直あのメッセージカードと、このカメラがなかったらまた俺は路頭に迷うところだったぞ」

「はっはっは、悪い悪い。連絡はしようと思ったんだけど、どうにもこうにも出血が酷くてね。電話をかけたところでコロッと死んでしまったよ」

自らの死にざまをこんなにも明るく話すことができる人間もそうはいないだろう。それはジャーナリストとして戦地を駆け巡ってきた彼だからこそ出来る笑顔である。

人間はいつか死ぬ時が来る。だからこそ最後の一秒まで懸命に生き抜いた男だからこそ出来る笑顔なのだ。

だがそんな彼の表情は次の瞬間にスツと影が落ちるのだった。

「それで士、どうして君はこんなところにいるんだい？」

そんなふう真剣に話しかける男に対し、士の返答はあまりにも

ぶつきら棒なものである。だが彼の今までの旅を振り返れば、そう
なってしまうこともまた仕方のないことかもしれない。

「もう全部馬鹿らしくなったんだ。必死になって救い守り続けて、
その旅の末に同じライダーに襲われて、それで最後には世界の破壊
をアシストするために作られた存在だ。誰だって馬鹿らしくなる」

「そうか、そうか」

「だからもうそっちに行ってもいいだろう。作られた命だから真っ
当なあおの世に行けるかわからないがな」

そう言っつて男のいる方向に土は一步踏み込もうとする。だが男は
すぐにそれを言葉によって押さえつけるのだった。

「それはまだ駄目だ。約束が違う」

「……約束、俺の周りに同じ志のものが集まるってやつか、それな
らこの結果を見れば」

「いや、それじゃない。話したはずだよ、君に貸したカメラは娘へ
のプレゼントだってね。それを渡すまで君が死ぬことは許されない
はずだ。いや、死ぬことが許されないとはい続けることによって、
君は必死に生き続けたんじゃないのか」

そう男がピシヤリと言い当てると、土は一步を後ずさる。それは
自らの心の内を読まれたかのように、土の想いを言葉にしているの
だから当り前のことかもしれない。

でも、それでも土は元の場所に戻ろうとは思わなかった。

「俺はあんたの言ったようにはなれない。写真は綺麗に撮れない、周りには冷たく当たる、そして極めつけは世界の破壊者だ。そんな俺に誰かがついてきてくれるはずないんだよ！」

「本当にそうかい」

「ああ、そうだ。だからこそ」

「甘ったれるな!!」

男は士の言葉を遮ると、そのままズンズンと彼のもとに近づいていく。そしてスツとその腕を上にあげる。

叩かれる。そう一瞬で認識した士は、反射的にギョツと目を閉じてしまう。

ポスン。

だが士が予感していた衝撃は来ることはなく、目を開けると男は士の頭をグリグリと撫でていた。

「世界が冷たく見えるのは、それはまだお前がレンズ越しにしか人を見ていないからだ。確かにカメラというものは過去の人や思い出を形として残してくれる。でもそれだけなんだ」

男は士の首にかかっているカメラを取り上げると、それを手に持つ。

「これから君は君の目で世界と向き合うんだ。だからこれは」

男は手に持ったカメラを己の力の限りで投げ飛ばしてしまう。そうした瞬間、士はまるで補助輪をいきなり外された自転車のように急に安定を失うのだった。

「おい、なにしてるんだよ！ あれがないと俺は……」

「あのカメラは遅から早かれあなる運命だったんだ。始めはちょっと戸惑うかもしれないけど、お前なら大丈夫だ。だからもう一度世界を見てみる、お前は『士』なんだから絶対に大丈夫だ」

「でも俺を待っている人間なんて」

「そういうな、とりあえず確実に一人はそこにいるぞ」

そう言っつて男が指さす先、そこには士が見知った人物がいる。自分が記憶を失くしてからずっと世話をしてくれた女性、自分の帰る場所になってくれるといっつてくれた女性が、あのカメラを持ってそこに立っているのだ。

「ほら、だから言っただろ。遅かれ早かれあれは娘のものになる予定だったんだ。その予定が今になっただけ。さあ、これで私と君の約束は果たされてしまったな」

そう言っつて男は士に背を向けると振り返ることなく歩き出してしまふ。それはあの時と同じ、自分で立ち上がり自分で歩きだせということなのだろう。

言われるまでもなくそれを理解した士は弱々しくありながらも、ゆっくりでありながらも。自らの足でその場から立ち上がる。

「ああ、もう怖いのも辛いのもごめんんだけどな。でもしょうがない……行ってやるよ」

そして見てやるよ。俺の瞳が何を映し出すか。

土はそのまま男に背を向けて歩き出す。それは彼とは逆方向であり、土の帰りを待っている夏海のもとへであった。

第7章「土」 part 2

勝てるはずがない、そう心のどこかで思っていたことはユウスケ自身も認めていた。だがここまで何もできないとは思ってもみなかった。

降りかかる最終形態のファイナルフォームライド。その全てが真正面から向かってくるために、ユウスケは何とか生き続けることができた。

ようは遊ばれているのだ。これは黒いディケイド、司にとってただの戯れでしかないのだから。

「くそ、くそおおお！」

「いくら叫んだところで始めからどうにかなるはずがなかったんだ。私に従えるのは8人のライダーの最終ファイナルフォームライド、それに引き換えお前はクウガの通常形態。勝てるわけがないんだ。……しかし下賤な」

そう少しの苛立ちを見せると司は右腕を上げる。その瞬間、アームド響鬼のファイナルフォームライドである巨大な茜鷹が生まれる。

「貴様はなぜ私に全力で挑んでこない。いくら通常形態といえど、先ほどから逃げているだけではないか。もしくは」

そこで言葉を止めると、司はユウスケから視線を外す。そして彼から離れた場所で、必死に土に呼び掛けている夏海に目を向けた。

「あんな死体が何かをしてくれると本気で信じているのか。……馬鹿馬鹿しいが、それはそれで面白いな」

「やめる！」

「嫌だね、あんな仮初の希望にしがみ付いてるお前の絶望した顔を
我は見たくなくなつたんだ」

「くっそおおおおおおお」

ブンと腕を振った瞬間に茜鷹が夏海に向かい放たれる。もうそう
なつてしまつたら、ユウスケには迷う時間すら惜しかった。

「うおりゃあああああああああ！」

茜鷹の横っ腹にユウスケは全力でライダーキックを放つ。だがそ
の蹴りは茜鷹を破壊することは出来ずに、逆に攻撃したはずのユウ
スケの体を傷つけていく。

「ぐっ、あぐっ」

着地姿勢すらとれずに、ユウスケはその場に無様に倒れていく。
もうこれで彼は立ち上がることができなくなつてしまった、それほ
どまでに司の攻撃はどうしようもないものなのだ。

そして落下位置をずらした茜鷹の余波もまた、どうしようもないも
のに変わりなかった。

まだ仮面ライダーであるユウスケなら耐えることもできたその余
波は、ただの人間である夏海には脅威そのものでしかない。そして

その余波は嵐となり夏海のバッグの中身を吹き飛ばしていくのだった。

「あ、ああ、土君の、土君の写真が！」

宙に散らばる無数の写真。それは夏海が土は一人ではないということを実証するために持ってきた、今までの世界の写真である。

土は不器用で、人当たりが悪いけれど、きっとこの写真を見れば今まで積み上げてきたものを思いだしてくれる。そういつた希望を全て含めた写真だった。

『ファイナルアタックライド プラスター ファ、ファ、ファ、ファイズ』

空に無数に広がる写真の一つ一つにポイントマーカーが設置される。そして何のためにもなく放たれた光線はその全てを燃やしくした。

あつけないほどの終わり。夏海の最後の希望は何一つ意味を残すことなく、ただ無残な炭になることしか出来なかったのだ。

「こんな写真が最後の希望だったのか。冗談にしては笑えないな。だがあの木偶人形を形作ってきたものが全て燃えたのなら、それはそれで面白い余興か」

司はそのままプラスターを捨てることなく、その照準を夏海につける。

「だがもうそれも飽きた。世界の創造前に戯れに来たがとんだ時間

の無駄だったみたいだな」

再びポイントマーカーが放たれると何十とあるそれは、全て夏海に向けて差し向けられるのだった。

「それではさよならだ力なき娘よ。また別の人類として作り上げてやるから安心するんだな」

「夏海ちゃん!!」

体中が軋む、出血が止まらない。だがそんなことなど考える余裕もなくユウスケはその場から駆け出す。だが間にあうはずがなかった、いやたとえ夏海のもとに辿り着いたとしても何十と広がるブラスターを止められるはずがなかったのだ。

『ファイナルアタックライド ブラスター ファ、ファ、ファ、ファイズ』

縦横無尽に放たれるその光線は何の規則性もないように思わせながらも、全てが夏海に向かって放たれる。

だからこそどうにかできるはずもなかった。だからこそ、夏海は自らの死を強く確信するのだった。

そしてユウスケの目には映るのだった。

真実のライダー達が耐えることが出来なかった爆発を細身の夏海が耐えられるはずもなく、彼女はまるで紙切れかのように宙に吹き飛ばされてしまう。

「……………えっ」

だがそんなビジョンが頭を駆け抜けた瞬間に、そんなことが起こっていない現実をユウスケは直視する。

いや、確かに彼の脳内には夏海が死んでいく光景が鮮明に浮かんだのだ。それほど変えることが不可能だと思われた、彼女の死。

だがそれは彼に、いや、彼らによって食い止められるのだった。

まるで世界そのものが歪んでしまったかのようなその壁は、何度も何度も二人が見てきたもの、だからこそ理解することができた。

それは彼が紡いできた絆なのだから、だからこそ納得することができたのだ。

煙がはれていくと共にそのライダー達は、夏海を庇うようにゆっくりと前に進んでいく。

そして8人のライダーは横一列になり黒いディケイドである司を睨みつける。

それは声を聞かずとも、名前を聞かずとも心が理解していた。今目の前にいるライダーは土が巡ってきた世界のライダー達であった。

だが視線を向けられている当の本人は、ライダー達に目を向けることもせず、遙か遠くの一点を見つめていた。

人間の目では到底見ることが叶わないその場所、そこには鳴滝がゼエゼエと息を上げて大の字に倒れているのだった。

「私に出来るのはここまでだ。ディケイド、お前が世界の破壊者になるか。それとも別の者になるか」

世界を繋ぐオーロラを作り出し、土に関係のあるライダーを呼び出す。それは鳴滝なりの謝罪の形だった。

そんな彼の腕にはキバーラが噛みついていて。だが彼女の真っ白なボディーは、まるで風化したかのように灰色に染まっており、その生命はすでに尽きていた。

だがそれを承知でキバーラは鳴滝のもとに戻り、そして死ぬと分かっていたながらも、鳴滝は彼女の力を全て使ったのだ。

あの黒いディケイドを見た瞬間に、鳴滝はすでに自らのことを全て思い出していた。

鳴滝はすでに故人であった。だがその命を司に作りかえられ、ディケイドを追う者として新しい生を受けた存在なのだ。

土に破壊衝動があろうと様々な世界を破壊して回るとは限らない。そのため鳴滝には、様々な世界のライダーにディケイドが破壊者であるということを伝える任務があったのだ。

何もせずに世界を通り過ぎては意味がない。各世界のライダーを土と戦うように仕向け、そのライダーを破壊することが司の狙い。

だが土が世界を破壊する使命を忘れてしまったのと同様に、鳴滝にも致命的な変化があったのだ。

それは鳴滝が生前から持っていた持ち前の正義感。彼は司の思い通り動いているように見えていたが、それは彼自身の行動理念に合致しているにすぎなかったのだ。

そして鳴滝の思っていた通り、土は世界を破壊するために生まれたものに変わりはない。だから彼自身、己の正義を間違っているとは思っていない。

だが目先の危険ばかりを追っていた彼は、いま本当に大切なことを思い出したのだ。それは結果としては同じかもしれないが、何も鳴滝はディケイドを倒したかったわけではない。ただ、この世界を守りたかっただけなのだ。

カメラの約束のために、土が唯一己の手にかけることが出来ない夏海を利用し、本来は彼女に土を倒させようとしていた。

だがもうその必要もない。彼は本当に倒すべき敵をようやく見つけ出すことができたのだから。

「もう時間か。……だが元々死者だった私には十分過ぎる時間だったな」

キバーラに供給してもらったエネルギーを使っても、なお足りることのなかったエネルギーはもちろん自ら捻りだしたのだ。もともとキバーラに定期的に噛みついてもらうことにより、存命をしていた鳴滝である。

己のなかの力が0になれば、死者であった彼に残っている道はただ一つしかない。

光の粒子になり指先から消えていく鳴滝の体。そして彼はこれから最後の戦いが起こるのであるう、その場所に目を向けるのだった。

「……おのれデイケイド、お前のせいですいに私の体すら破壊されてしまった」

ずっと土にかけてきた憎まれ口を言葉にすると、最後に鳴滝はフツと笑みを浮かべるのだった。

「……………だが悪い時間ではなかったぞ」

鳴滝は最後の最後まで自分に尽くしてくれたキバラーの頭にそつと手を添える。そして彼の光とキバラーの風化した体は、絡み合うようにして天に舞い上がるのだった。

こうして世界の破壊者を倒すためにあの世から舞い降りた使者は、ついには世界を破壊するものに力を貸し死者として天に帰るのだった。

第7章「土」 part 3

ああ、あの親父の言ったとおりだったな。

そう思いながら彼はゆつくりと目を開けていく。そして今ある光景がまるで幻か何かでないだろうかと思いつく。だがそんなはずがないことは自分が一番よく知っていた。

だって彼は門矢土だから。土の周りには多くの人が集まってくるとあの男が教えてくれたのだから。

「……全く、全部あの親父はお見通しってことか」

そういつものように憎まれ口を叩くと、まるで今まで嘘寝をしていたかのように土はよっと声を上げ立ち上がる。

そしてまるで自分が中心だと言わんばかりに、9人のライダーの真中に無理やり押しいるのだった。

完全に死んでいる状態からの蘇生。それは万人からすれば、己の目を疑い、そしてすぐにでも安否の声をかけたかもしれない。

だがここにいるものは誰もそれをしようとはしなかった。それは彼の復活をここにるものは皆確信しており、再会を喜ぶ前に倒すべき相手がいたからだ。

しかしそんな暗黙の了解を理解できないものが一人だけいた。

「……なぜ木偶人形が蘇る。私は新しい破壊者を創造した記憶はな

いぞ」

「当たり前だ。俺はお前なんかの力を借りてないんだからな」

全てを作り出してきた司。だからこそ現状を理解できるはずがないのだ。自分という存在が手を貸さずに、何かが生まれることに納得できるわけないのだ。

「だったらどうして貴様がここに存在する。……何者だ貴様は」

「決まってるだろ。俺は通りすがりの……いや、違うな」

いつもの決めゼリフをいうことなく、土は言ったん言葉を切る。

それは彼にとって大きな変化があったことを表している。昔の土はレンズ越しに世界を見て、そして自らを通りすがりといい、可能な限り他人とは関わらないようにしていた。

だが今の土は違う。もう彼は自らの目で世界を見る覚悟が出来ており、そして通り過ぎることをやめたのだから。

土はデイケイドのカードを取り出すと、それを司に見せつけるようにして構えた。

「俺は……、俺は通り過ぎずに戦うことを決めた仮面ライダーだ！
変身！！」

『カメンライド デイケイド』

空中に浮かぶ装甲は土の体を覆うように装着されていき、そして

最後に黒の線が顔に入ると変身を終える。

それは今宙にいる黒いデイケイドとは違う。9人のライダーが帰りを心待ちにしていたあのデイケイドであった。

10人のライダーが横一列になる姿。それは存在しているだけで他を圧倒するオーラがあり、それを証明するための力もちろん備えている。

だが司はそんな10人のライダーを目の前にしても、全く驚く様子を見せなかったのだ。

「何が戦うことを決めた仮面ライダーだ。たかがノーマルフォームのライダー9人に木偶が1人増えただけ。今まで8人の進化した姿と戦っていた我の敵ではない。それに貴様らライダーでは絶対に勝てるはずがないんだ」

そう口にすると司は自らの右腕を上げる。それは8人のライダーとの戦いの最中に見せた、相手を強制的にファイナルフォームライド状態にする力の発動であった。

だからこそ司は理解することができなかった。創造主である彼の意に誰も従わないこの光景に。

「なぜだ、なぜ誰も動かん」

次に左腕を上げてみるが、それでも10人のライダーは誰もその姿を変えることはない。

「悪いな、ここにいる奴は全員俺の先約だ。誰も操ることは出来ぞ」

士の口にした言葉。それは様々なライダーの世界を周り、その全
てと絆を紡いだ彼だからこそ口にできる言葉だ。いや、司自身にも
その言葉の意味はわかっている。だが分かっているからと言って、
今の事実を納得できるはずがなのだ。

彼は全てのものの創造主。彼に操れないものなどないはずなのだ
から。

「くつくつくく、あっはっはっはっはっは！ 確かに何かの
ミスでそこにいる進化しそこなったライダー達は操れないな。だが
それがどうした!!！」

司は両手を天に構えると、強化版ファイナルフォームライド、エ
ンペラーキバアローを召喚する。

「我は進化した8人全てのライダーをさらに強化した力を持ってい
る。この力がある限り、我に敗北などありえん」

「力があるから負けないか。そう思ってるんだったらお前はライダ
ー達がどうして進化できたか全く理解してないってことになるな」

「なにを！ 己より強い敵が出てきたから、それに対抗するために
強い力を手に入れる。それが進化の全てだ」

「違う！ 新しい力を手に入れたからライダー達は強くなったんじ
やない。ライダー自身が強くなったから、それに見合うために力が
強くなったんだ」

「何が違うというんだ。そんなのただの言葉のあやに過ぎぬ」

「それも違うな。俺達ライダーは力を示すために正義を貫いているわけじゃない。正義を貫くために、力を示しているんだ!!」

「それだけほざくなら、貴様の正義とやらを我に見せてみる！ 我の力で叩きつぶしてくれるわ!!」

その叫びと共に司の手に落ちるエンペラーキバアロー、狙いは一寸の狂いもなく土に向けられる。そんな姿を見て、土は一步前に出る。そしてケータッチをベルトに装着するとコンプリートフォームにチェンジする。

そんな土の姿を見届けた9人のライダー。そして彼の隣にワタルが立つのだった。

「人間とファンガイアの世界。それを治めることに自信がなかった僕の背中をあなたは押してくれた。だけど二つの種族の間で揺れていた僕よりも、あなたはもっとずっと多くのもの間で揺れていたんですね」

「ああ、そうだな。だからこそ迷いもしたし悩んだりもした。だが決めたのは自分の意志だ、俺もお前もな」

そう語りかけると、土はケータッチのボタンを押す。

『キバ カメンライド エンペラー』

ケータッチの力は本来強化フォームの仮面ライダーを召喚し、土自身と同じ行動をとらせ攻撃する技。だがケータッチを押しても、彼は動くことはなかった。その代わりに、光りが上がると共にエン

ペラーフォームに変身したワタルはザンバットソードを構えるのだった。

「今さら進化したフォームを出しても遅いぞ！ 私はさらにその先の力を持っているのだからな！！」

『ファイナルアタックライド エンペラー キ、キ、キ、キバ』

その電子音と共に放たれる死を具現化したかのような一撃。だがそんな圧倒的死が迫り来ようと、ワタルには慌てた様子はなかった。

「ハアアアアアアア！」

エンペラーキバアローに向かい放たれる一閃。その剣圧は鋭い刃となり、自らの強化ファイナルフォームライドを切り裂くのだった。

「な、何故だ。我の力は8人のライダーを破った最強の力のはずだ！」

唾然とするしかなかった。赤子の手を捻るように倒した8人のライダーの、さらに上の力がこつもあつさりと破壊される様を見た司にとってはそうである。

だが彼の的外れな『最強』という言葉聞き、士は馬鹿にするかのように声を上げるのだった。

「……ああ、何だそういうことか」

士は黒いディケイドの慌てる姿を見て、彼の心境の全てを見透か

す。だがそんな土の態度の全てが気に入らないのだろう、司は再び両手を上げると次に強化されたドラグレッターとブレイドブレードを召喚する。

そしてそれに合わせるようにして、シンジとカズマが土の隣に立つのだった。

「あなたやユウスケがいなかったら、俺とレンさんは分かり合えずにいた。どんなにわかりあっても、すれ違いはある。そして俺は世界と土のすれ違いを直すためにここまで来たんだ」

「そうですね、チーズ。たとえ全てを失っても、0からやり直せつて言ったのはチーズじゃないですか。それにチーズは一人じゃない、俺たちがいます！」

彼らしい明るいステレオ音声で励ましのエールを上げる。そんな二人の姿を見ると土はやれやれと頭を掻くのだった。

「シンジ、お前はそういうが、俺が手を貸さなくても二人はきつと分かり合っていたはずだ。俺はそれを速めてやったにすぎない。それとカズマ、俺はチーズじゃなくて、チーフだ、いい加減覚える！」

『リュウキ カメンライド サバイブ』

『ブレイド カメンライド キング』

ケータッチのボタンを押した瞬間に、先ほどのワタルのように二人の姿が変わっていく。

「おい、その黒いの。創造主だか何だか知らないが、結局怖かつ

「たんだろ」

「何を言っている!!」

『ファイナルアタックライド サバイブ リュ、リュ、リュ、リュ
ウキ』

『ファイナルアタックライド キング ブ、ブ、ブ、ブレイド』

迫りくるサバイブドラグレッターとキングブレイドブレード、だがそんな圧倒的死の予兆も、先ほどの焼きまわしにすぎない。

「ウオオオオオオオオオオオ！」

二人の叫びと共に放たれる剣撃、それは真つ二つにファイナルフォームライドを破壊するのだった。

「怖くないんなら、俺に世界の崩壊の手助けなんかさせずに、さっさと世界をぶっ壊してればよかつたはずだ。だがお前はそれができなかった」

「ッ」

「お前は何も進化したライダー達の力が欲しかったわけじゃない。進化したライダー達の姿を今まで見てきたからこそ………ワザワザこっちに出向くようにしたんだろ」

次に空中に現れたのは強化されたフェイスブラスターとアギトトルネーダー。そして前の出るのはもちろんこの二人である。

「確かに力があるために戦い、それを投げ捨てたくなるかもしれない。だけど戦うという罪を背負ってでも、守りたいものがある。それをあなたは気づかせてくれた」

「前の世界でしつこく俺を守ってきたんだ。その礼をここでさせてもらうぞ」

落ち着きのある二人の男達もまた土に隣り合うように前に立つ。

「俺もお前と同じだ、もしかしたら俺が存在したこと自体が罪なのかもしれない。だがそれでも守りたいものがある。それとアギトの世界では随分といたぶられたからな、またお前の背中を貸してもらうぞ」

『ファイズ カメンライド ブラストー』

『アギト カメンライド シャイニング』

「お前は怖かったんだろ。今までライダー達は絶対絶命という危機の中でも、数多くの奇跡を起こしそれを打ち破ってきた。そんな奇跡がまた起こるんじゃないかってな。だからこそ相手の本来の世界で戦おうとはせず、ライダー達に悪影響しかもたらさない、この最果ての世界に呼びこんだんだ」

そう士が声を上げた瞬間に、司は自らが気づかないほど自然に、初めて一歩後退する。そんな彼にはもう一縷の余裕さえ存在していなかった。

「黙れ、黙れ、黙れ！」

「いや、黙らないな。あの8人のライダーは世界をまたぐ力を持つていない。それゆえに無理をしてこの世界に来た時にはもう体が限界だったんだ。それでもあれだけの力があつた。本来の世界であいつらが戦えば、一人でお前なんて倒しただらうな」

「黙れと言っているだらうがああああああ！！」

『ファイナルアタックライド ブラスタ― ファ、ファ、ファ、ファイズ』

『ファイナルアタックライド シャイニング ア、ア、ア、アギト』

電子音が鳴り響くと共に飛び交うポイントマーカー、そして空を縦横無尽に走り回るシャイニングアギトルネーダー！

それは先ほどとは違う変則的な攻撃であるが、その二人に慌てる様子はない。それは二人にはやるべきことがわかっていたから、しかしその方法は真逆であつた。

「ハアアアアアアアアア！」

自らの叫びと共に放たれるファイズブラスタ―、それは敵の光線とは比べるのも馬鹿らしいほどの太さの光線を放つと、全てのポイント―を破壊する。

それでも高速移動を可能にしているシャイニングアギトルネーダーは、その光線をギリギリのところでかわしてく。だが移動ポイントを制限してもらつことにより、彼はその一撃を真っ直ぐに放つことができたのだ。

やないつてのを、俺が証明してやるぜ！」

「クロックアップの世界、俺も孤独な世界に生きていた。だからこそわかる、孤独の辛さが。だが俺はお前という友がいるからこそ、孤独の世界でも生きていけると思った。俺の知ってるお前はこんな孤独に負ける男ではないぞ」

「あなたはたった三流派しかない僕達の世界よりも、多くの世界を繋げてきた。だからこそ、みんなここに集まったんですよ」

「ああ、お前たちの言うとおりだ。たとえ存在を否定されても、孤独である時があっても、それでも人は分かりあうことができる。それはお前たちの存在が証明してくれた！」

『デンオウ カメンライド チョウクライマックス』

『カブト カメンライド ハイパー』

『ヒビキ カメンライド アームド』

放たれる3つの狂気、受け止める3人のライダー、だが結果は見るまでもない。三人の力が一つに集約し放たれると、3つの創造を跡かたもなく消し去っていくのだった。

「確かに俺は破壊しかできない空っぽの木偶人形だったかもしれない。だが負けるわけがないんだ。完璧だと勘違いして空っぽの創造しかできないお前に、たくさんの人たちから、いろいろなものをもたらした俺達が負けるわけないんだよ！」

そして後ろで構えていた最後のライダーが士の隣に立つために一

歩進む。それは彼の旅をずっと隣で支えてきてくれた仮面ライダー
クウガ、小野寺ユウスケである。

「それじゃあ行くか土」

「慌てるなユウスケ。……さてまずは」

今にも走り出してしまいそうなユウスケを抑えると、土はケー
タッチのボタンを押す。

そのボタンは今までユウスケが隣にいるために、使うことを躊躇
した一つのボタン。今までの世界では、ケータッチにより他のライ
ダーを召喚しても、そのライダーが土に話しかけることはなかった。

だからこそ、ただ力の行使としてそれを押すことができたのだ。

しかし今の土はそのボタンを押すことに戸惑いはなかった。真実
の目でユウスケと向き合い、心の底から彼を仲間と認めたからこそ、
土はクウガのボタンを押すことが出来たのだ。

『クウガ カメンライド ライジングアルティメット』

その姿は他のフォームでもアルティメットでもない。ユウスケが
ユウスケ自身として進化した全く新しい稲妻の戦士である。

さらに土はライドブッカーから一枚のカードを取り出すと、それ
を無理やりケータッチに差し込んでいくのだった。

「もう一人呼んでやらないとふてくされる奴がいるからな」

士はそう言うが、本来の規格と全く違うカードを挿入されたからか、ケータッチはバチバチと火花を上げ始める。だが士はそんなことなど一切気にする様子もなく、無理やり画面を押すとそれを宙に投げるのだった。

『カメンライド デイエンド』

そう音声を上げると同時に爆散するケータッチ、だがその効果は間違いなく発揮されるのだった。

それは空に消えて行った光がまるで巻き戻しになるかのように一点に集まっていく光景。そして士の右隣りには見間違えるはずもない、青い仮面ライダーが現れる。

だがここに彼がいるのは当り前なのかもしれない。彼もまた士と共に様々な世界を回ってきた仲間なのだから。

「よかつたのかい士、あれはかなりのお宝だったが」

まるで蘇れることがわかっていたかのように、海東は自らの存在に困惑を覚えない。そんな彼の声を聞くと、ケータッチが壊れたためコンプリートフォームでなくなった士は、ああ、と頷くのだった。

「もうあの力はいらない。あの力でライダーを召喚しなくても、俺の隣には多くの人々がいてくれる」

そこで言葉を切ると、士はきつと天国から見ていてくれてるであろう、その男に向かい声を上げるのだった。

「……俺は門矢士だからな」

何のしがらみにもとりつかれていない、澄み切った彼の瞳を見て海東は満足げに声を上げる。

「……さすが僕の認めた最高のお宝だよ」

揃うべき土の仲間が今ここに全員集結する。だからこそもう何の迷いも存在しない、やはり最後に決めるべきはこの三人の他にないのだから。

そんな全ての準備が整った土達。だが司もまた全ての準備は整ったと、自らの手を天に掲げるのだった。

「貴様ら、我を倒そうというのか、全ての創造主である我を、だがな!!」

司が声を上げた瞬間に全ての強化ファイナルフォームライドが空に現れる。

放たれるは世界を創造したものが完璧と称する最強の矛、そして誰にも壊すことのできない鉄壁の盾であった。

だがそれに中身がないことは、ここにいる全てのものがわかっていいる。彼には外面を作る力があるうとも、内面を作る力はほとんどないのだから。

もし司に内面を作る力があるのなら、土が全てを破壊する使命を忘れることも、鳴滝が自らの正義感で動くこともなかったのだから。

10が完璧だと思っていた司と、たとえ0からでも歩き出そうと

した人類。それに気づけず10である今から進もうとしない時点で、司の作りだすものは完璧でありながら、完璧でないという矛盾をおっていたのだ。

だからこそ、0から這い上がってきた8人のライダーによって、空に浮かぶ強化ファイナルフォームライドは全て破壊されていく。

そうしてライダー達が作ってくれた道を見上げ、三人は必殺の体勢に入るのだった。

「行くぞ、ユウスケ、海東」

「おお！」

「わかったよ」

士はもう自らを否定することも、世界を否定することもなく、自らの正義を示す力のカードをベルトに差し込む。

カードにより作られた道は真っ直ぐに黒いディケイドに伸びると、士はディメンションキックの体勢に入り、隣のユウスケと海東もまたライダーキックの体勢に入るのだった。

「さあ、見せてやる。これが人類の答えだ！」

『ファイナルアタックライド　デイ、デイ、デイ、ディケイド』

「くそ、くそ、くそおおおおおおお！！！」

彼らの接近を見て、司は自らの限界を超えたありったけの武器を

作るが、その全ては8人のライダーにより破壊されていく。だが彼らの手助けがなかるうと、きつとそのトリプルライダーキックを止めることは出来ないであろう。

確かに司は完璧かもしれない。しかし逆にそれが司が限界であるということを目指しているに他ならない。

だが士達は絆という止まることをしらない無限の力を持っているのだから。

それゆえに最強最速のトリプルライダーキックを司が避けられる道理はないのだ。

「ハアアアアアアアアアアアアアア！」

だからその結果はきつと初めから決まっていたのだろう。

そう全てのライダーが確信した瞬間に、トリプルライダーキックが黒いディケイドである司を貫く。それは同時にこの長きに渡る戦いの決着をつけるものでもあった。

第7章「土」 part3 (後書き)

はい、そんな感じでおはこんばんにちは、白翼です。

前は、一日にここまで更新できるかと思い後書きをかかなかったのですが、この始末でした。

そんなわけで、よーーやくここまで来た感じの、私の中のデイケイド32話。

まあしかし、この小説のことを多く語るのは、また全てを更新し終えた後でもいいと思うので、今日はこの辺ですな。

最近は午前更新が多いですが、次はどの時間帯になるかはまだ決まっています。

しかしかなり近いうちに、今回の32話を超えた先

仮面ライダーディケイド 最終話 「本当の自分自身」

の更新でお会いしましょう。

ここまで来ますと、もう本当に終わりが見えてきましたが、残り少
しの更新もどうぞよろしくお願いします。

では、ノシ

仮面ライダーディケイド最終話「本当の自分自身」

「いやったあああああああ」

世界の全てをかけた戦いの勝利に、ユウスケは変身を解きその場で飛び上がる。

だがその想いはユウスケだけでなく、土のために集まった8人のライダーは皆それぞれ体全体で今の嬉しさを表すのだった。

「全く僕は君みたいに熱くなれそうにないね」

そう海東は皮肉気に声をあげ変身を解くが、その表情はユウスケ同様喜びに満ちている。そして二人は土の元に歩み寄るのだった。

「やったな土、これで全部終わったんだよな」

「……ああ、お前達ライダーの戦いはここでお終いだ。……だが俺は」

何を心配することがあるのか、土は変身を解くことなくそのまま俯いてしまう。その時だった、彼の心を表現したかのように世界が揺れ始めたのは。

「な、何ですかこれは」

あまりにも酷い揺れに夏海はその場に倒れそうになる。だがそんな彼女を土が抱えてやると、彼はスツと空を見上げるのだった。

土につられて他のライダー達と夏海が空を見上げる。そしてそこにいる誰もの光景を見て、顔を青ざめていくのだった。

そこに映るのは辺りに散らばっている数多の地球と地球が衝突しあう姿。

全てを終えた今だからこそ、そんなことはあるはずがなんと全ての者が思っただろう。だがその希望的観測は脆くも崩れ去るのだった。

「う、うわあああああああ！」

「ぐおおおおおおお！」

土を助けるために現れたライダーが世界がぶつかり合うことに次々とその姿を消していく。それはまるで世界が一つに融合する前兆と同じ。そしてきっとそれが正しい答えなのだろう。

全てを救ったと思った時の喜びの思考停止ではない。むしろそんな思いがあつたからこそ、希望と絶望の温度差で、ユウスケと海東と夏海はうまく言葉をまとめることが出来ずにいた。

「土君どういうことなんですか。創造主を倒したから世界の融合は止まったんじゃないんですか」

そんな夏海の疑問に土は首を横に振る。それがわかっていたからこそ、彼は仲間と喜びを分かち合わなかったのだから。

「そううまくはいかないみたいだな。元々世界の融合はギリギリのところまでできてしまっていた。それにもうこの時点で消滅してしまつた世界だって少なくはない」

「じゃあ、俺達は間にあわなかったのか。もう破壊は止まらないのかよ！」

ユウスケは自らの無力さを嘆き地面を殴りつける。それは全ての人の笑顔を守るといふ思いを叶えられないと知ったから。結局自分のしたことは全て無駄だったのかという後悔のために。

だが士は違った。この状況になる可能性があったからこそ、彼は立ち上がりそしてここまで来たのだから。

士は変身を解くと、地面を殴りつけているユウスケのもとにゆっくりと向かっていき、その拳を止める。

「……………士」

「そこらへんでやめとけ。お前の拳は自らを傷つけるものなんかじゃない、人々の笑顔を守るためにあるんだろ」

「だけどその世界は……………」

力なく声に出すユウスケを見て、士は彼のもとからゆっくりと離れて行く。

次に士は海東のもとに歩くと、彼の肩にポンと手を置いた。

「すまないな海東、せつかく手に入れた最高のお宝はなくなっちゃまうが。……………それでもまた探し出してくれ」

「……………士、何を言ってるんだ」

士が話す声のトーンと表情に、海東は言いようのない不安を覚える。いや、世界が崩壊していることを頭で理解しているからこそ、士の振る舞いは明らかに落ち着きがあるものだった。

それは一重に考えれば、世界崩壊までに残された時間を有意義に使うとさえ思える。だがもし士がその逆を考えているとしたら。

海東には今の言葉が………、遺言のようにも取れてしまった。

彼はそんな不吉な思いを払拭するかのように声をあげようとする。だが、そんな彼を止めるように士はバツと手をかざすのだった。

「……じゃあな。もうそんなに時間がないんだ」

そんな何かに対し覚悟を決めた士の表情を見てしまったら、海東はそれ以上何も言葉にすることが出来なかった。

それは士の言葉の通り、本当に時間がないのだろうと言うこと。そして、士と旅してきたのは自分やユウスケだけではないという思いがあったからだ。

そんな海東の思想通り、最後に士は夏海のもとに歩み寄ると、彼女に向かって手を差し伸べる。その手には今まで片時も離すことがなかったあのカメラが握られていた。

「……何のつもりですか士君」

初めて士が写真館に来た際に、唯一自分の持ち物として掴んでいた二眼レフのカメラ。時には夏海やユウスケよりも大切に扱ってい

たそのカメラ。

そんな大切なものを差し出す理由が夏海にはわからなかったのだ。

だがそれがわからないのは夏海だけである。これを彼女に返すのは、士があつた男と交わした大切な約束なのだから。

「何のつもりもないさ、俺にはもう必要なくなったんだ。だからこそあるべき場所に返そうと思ったただけだ」

「……あるべき場所」

「そういうことだ、ほら受け取れ」

ポイと素っ気なくカメラを投げるものだから、夏海は反射的にそれを手に取ってしまう。だが無理やりにしても、彼女がカメラを受け取った瞬間に、士と男との約束は果たされるのだった。

そしてまるで彼は何かから解放されたかのように、その体からゆっくりと光の粒子に変わっていく。

それは海東が死ぬ瞬間と同じような輝き。しかしその輝きは絶望の光ではなく、希望の温かさに包まれた光だった。

「この世界の崩壊を止める方法は一つだけある。それは創造主の力で生み出された俺の力を使い、再び世界を分裂させることだ」

「そ、そんなことが出来るのか士！ でもその光は……」

海東の死にざまを目と鼻の先で見っていたユウスケは、辿り着きた

くもない答えを頭に浮かべる。だがそれは彼の口から言葉になることとはない、だからこそ土が代わりに声をあげるのだった。

「まあそういうことだ。俺の旅はここでお終いだ」

「……土君、それって」

ユウスケと夏海が彼に近寄ろうとすると、土の覚悟をいち早く感じ取った海東が二人を制止する。そして彼は静かに問いかけるのだった。

「なあ土、そしたら君はどうなるんだい」

そう三人の想いを代表して海東が声を上げる。だが土は静かに首を振るだけであった。

「どうなるかは俺にもわからない。だが一つ言えるのは、この世界にディケイドという存在がある限りまた世界の崩壊が始まる。それは絶対に避けられないことだ。だから俺が消えるまえに」

そう言葉を切ると土は夏海の手を持っているカメラを指さす。

「最後に俺の写真を撮ってくれ。それぞれの世界で役割を与えられた俺でも、破壊者としての俺でもない。門矢土としてここにいる俺の写真を」

優しく微笑む土の表情を見て夏海はカメラを構える。本当は消えろと言われても、はいそうですかと言えるほど、彼女は心を強く持っていていなかった。

言いたいこともあるし、引きとめたい思いもある。だがそれでも夏海はシャッターを切らなければならないのだ。

士の体が完全に消えてしまうその前に、彼がここにいたという証しを残すために。

それが彼の最後の願いなのだから。

カチャリという四人にとって聞きなれたシャッター音が小さく鳴り響く。そしてもう安心だと、士は三人に背を向けるのだった。

そんな背中を見ても三人に言葉はなかった。

何か言葉をかけてしまったら。

今胸の内に広がる想いを話してしまったら。

その瞬間に士がもう帰ってこないことを肯定してしまうかのようで、頭では理解していても心は必死に現状を否定し続けていたからだ。

そうして士は光の粒子になりながら歩き続ける。だが彼は最後に何かを思い出したかのように、スツと三人のほうに振りかえるのだった。

「そういえば言い忘れてたけどな。お前たちとの旅。……悪くなかったぞ」

そう言って士は最後に手を振ると、そのままスツとその姿は消えていってしまう。そして彼の存在が消えたと同時に、空一面に広

がっていた数多の地球が、一つ、また一つとその姿を消していく。

それは何も世界が消滅したからではない。そんなことはここに
いる三人には痛いほどわかっていた。

ジツとしていることに耐えることができずに、夏海はその場から
走り出してしまふ。そして土が消えたところまで辿り着くと、彼か
ら託されたカメラを強く握るのだった。

「……土君、この場合何て言ったらいいんですかね」

世界を救ってくれてありがとう。創造主から私たちを守ってくれ
てありがとう。

本当なら感謝の言葉しか浮かべることができないライダー大戦の
終幕。

だが三人は誰ひとりとして喜ぶことができずに。

ただ空を眺め続けることしか出来なかった。

プロローグ「旅の途中」 part 1

世界の崩壊が始まり、土と夏海と栄次郎の旅が始まり。数々の世界を渡り歩き、確かな絆を作ったディケイドの旅。

その最後を締めくくるライダー大戦が終わりしばらくの時が流れた。

融合した世界を土は自らの命を燃やし、これを再び分離。

そして自分のいた世界に戻ることに出来た夏海は、今まで通りの日常の中で暮らしている。

そう、それは世界の崩壊を止めるために旅に出る前の状態。なぜそんな状況かは言うまでもないであろう。

今の写真館にはユウスケも海東もいない。それも大きな要因であった。

それは本当に今までと何も変わらない生活である。

だがそれゆえに彼女には現状を受け入れることができなかったのだ。

「……………土君」

そう小さく呟いてみるが、彼女の声に彼が応えてくれるはずもない。

だからこそ、夏海はゆっくりとその手を伸ばすのだった。

「……光家直伝、笑いのツボ！」

「……………く、くつくつくく、あっはっはっはっはっは、こら夏海、あっはっはっは」

今まで愛用のソファで眠りについていた土は、笑いのツボを押されると同時に自らの意志と関係なく笑い声を上げる。

そんな彼の姿を見て夏海は満足げに声を上げるのだった。

「ずっと寝てるからですよ。私たちが住んでいた世界に戻ってる間に、ユウスケとおじいちゃんが買い出しに行つて、私たちは大掃除するって言いましたよね」

「あっはっは、そんなの俺にはっはっはっは、関係なっはっはっは」

そろそろ息が続かないのか、土は腹を抱えながら苦しそうにソファに顔をうずめる。そうやって土の視線が彼女から離れたことにより、夏美は今日の前に広がる日常にホッと一息をつくのだった。

どうしてこういう状況になったのか、それはあのライダー大戦終幕のすぐ後に事が起きた。

夏海とユウスケが泣き崩れ、海東は物憂げな顔で空を見上げている中、何の冗談か土は悪びれもなく彼ら三人のもとに帰ってきたのだ。

喜ぶよりもピシリと表情が凍りついてしまう。だがそんな彼が出した言葉は、いかにも彼らしいものだった。

『よく考えたらどうして俺が皆のために犠牲にならなくちゃいけないんだ。ちよつと感傷的になりすぎてたかもな』

それならそれで、まあ三人としてはいいかもしれない。だがユウスケが呆けた顔で、ディケイドが存在すると世界が崩壊するんじゃないかと声をあげると、これもまた土らしい言葉が返ってくるのだった。

『確かに俺の存在は世界を歪ませる。だから今まで通りだ、いろいろな世界を巡りその世界のライダーを助けて行く。それで世界の均衡を保っていけばいいんだよ』

それができるのならさつさと欲しかった。それは三人全員が思い浮かべた言葉であった。

そんな形で今も土は写真館にいる。それは本当に今まで通りの夏の日常であった。

だがそれはあくまで世界の融合を止めた後の話である。ユウスケや夏海が、どうやって世界の融合を止めたのか。どうして土がこうして無事なのか。それは何度も何度も二人が訪ねたことだ。

しかしその話になると土は頑なに口を紡ぎ、決してその話題に触れようとはしなかった。

さすがにこれ以上はまずいと、夏海は再び土の笑いのツボを押すと、ようやく彼は笑い地獄から解放される。

「それで土君。これから私たちはどこに行くんですか」

夏海の問いにすぐに応えることは出来ずに、土はゆっくりと息を整えていく。そして、今さらながら落ち着いた態度を見せると、声を上げるのだった。

「どこへだつて行かさ。俺は通りすがりの仮面ライダーだからな、全ての世界を制覇してみるのも面白いな」

「もちろん、その旅には僕も同行させてくれるんだろうね」

突然海東が部屋に入ってくると、土に一番近い椅子に座りこむ。そして彼を筆頭に、ユウスケも写真館に帰ってくるのだった。

「おいおい、俺を置いて行こうとしないでくれよ！」

ほぼ同時に現れた大の大人二人のステレオ音声。土は片方の耳をふさぐと、シツシツと手を払うのだった。

「うるさいな、右と左からピーピーと」

心の底から鬱陶しそうに二人を追い払うようなしぐさをする土。

そんなふうには和気あいあいとしている土達。だがその輪に入ることなく、窓の向こうでは一人の男が彼を見つめているのだった。

その茶色のコートと帽子、そして印象深い眼鏡の男。この男も、見方を変えれば土達と共に世界を渡り歩いてきた男である。

「デイケイドが世界を渡るなら、それを監視し続けるのが私の役目

だ。おのれデイケイド、どうやら私の安息はまだまだ先のようだな」

世界の分裂後に、なぜか元から死人であった鳴滝はあの世に行くこともなく、現世に生を成すこと出来たのだ。

それがどういった理由なのかは彼自身も理解はしてない。だが人として生まれた瞬間に旅が始まっているというのなら、きっと鳴滝がまだ生きているということは、それだけで意味があるということなのだろう。

そしてそれは彼女も同じなのだろう。白いコウモリであるキバールは、土を見つめる鳴滝の肩にゆっくりと降り立つのだった。

「ここで見てるだけでいいの？ もう土が世界の破壊者じゃないってわかってるわけだし、仲間になっちゃえばいいんじゃないの」

「いや、それは違うぞキバール。確かにデイケイド自身に世界を破壊するつもりがなくとも、時としてその力が暴走する可能性もある。その時に奴を止めるのが私たちの仕事なのだ」

「ふーん、まあ私はどっちでもいいんだけどね。またこうして旅に出られるだけで十分」

そうキバールは応えると、そのまま彼女自身の仲間視線を向ける。そこにはたとえ短い時間であっても、自らを仲間と認めてくれた彼らの笑顔があり、もちろんその輪に戻りたいという思いはあった。

だが彼女の仲間に対する思いは、結局鳴滝に対する愛に勝つことは出来はしなかった。

そして土達から視線を外した二人はその場から姿を消していくのだった。

皆が一斉に帰ってきたことにより、急激に騒がしくなる写真館。だが、そんな輪の中で一人だけこの場に帰宅していないことに夏海は気づくのだった。

「あれ、ユウスケ。おじいちゃんはどこに行っただんですか」

一緒に買い物に行っただはずのユウスケが帰ってきて、栄次郎が帰ってきていないことに疑問の声をあげる夏海。そしてユウスケはそんな彼女に応えるように、ピツと指を指すのだった。

「え、ああ、おじいさんなら」

「

プロローグ「旅の途中」 part 2

栄次郎は買い出しで買ってきた消耗品を棚に仕舞うと、その足を皆のいる場所ではなく現像室に向ける。

理由はただ一つ、そろそろあの写真が現像してしまおうと思ったからだ。

「おお、出来た出来た。なかなかいい写真じゃないか」

そういつて取り出したのは、士が光りになる直前に夏海が映した一枚の写真。

撮影現場にいた士たちなら、この写真を見てきつと驚きの声をあげるだろう。だがその瞬間を知らない栄次郎は、その人たちの笑顔を見て顔をほころばすのだった。

そこには士を中心にして夏海が、ユウスケが、海東が、そして彼らの巡った世界のライダーが彼を囲むようにして笑顔を向けてくれていた。

それが士が生存した本当の理由である。士一人の力では司に勝てなかったのと同様に、本来士一人の力では世界の崩壊を止めることは出来るはずがないのだ。

普通に考えたらただの犬死。そうなることは重々承知であっても士は自らの命を燃やしたのだ。

だが士の周りにはたとえその場にいなくとも力を貸してくれる仲

間があり、絆がある。

その想いがほぼ不可能であった世界の崩壊を止めるという偉業を成しつつ、土を生存させたのだ。

しかしその真実を知っている土本人は、それを口にするとはきつとないのだろう。

それは今さらになり面と向かって絆だ仲間だと言葉にすることが恥ずかしいということ。

そして言葉にしなくても、いつも周りには仲間がいるということ。

それを土は知っているのだから。

そうして、世界の破壊者である彼の旅は終わりを告げ。

新たな絆を紡ぐための土の旅は始まりを告げるのだった。

後書き

この感想は一切の読み返しをしません。感情のままに書いたので、読みにくいところが多いと思いますがよろしくお願いします！

そんなわけで、いつも通りおはこんばんには、白翼です。

このたびはまた最後に後書きという形で、一コマ取らせていただいたことをここに書きまして、始めたいと思います。

スー、ハー

このたびは、仮面ライダーディケイド第32話「土」のご愛読ありがとうございました！！

皆さまの声援や、クリックの人数の確認などを糧に、全力で突っ走らせてもらいました！！

さてさて、後書きということですが、まず何から話したらいいですかね。

まあ前述したように、この作品は私が望むディケイド32話をそのまま形にしたものになります。

オールライダーも2010の映画も両方ほんとおおおにおに大好きなのですが、私の中ではせっかく本家が出てきた仮面ライダーブレイドや、鳴滝さんの正体、ものすごく面白そうなTV最終回予告。

それを自分が納得できるように終わりにしたかったんですね。

そして何よりも一番書きたかったのが、ディケイド本編のOPに出てくる、泣いている士にカメラを差し出す男の存在。(新しい夜明けへと続く道に変わるだろう。辺りで出てくるシーン)

あれこそ、本当に何一つ拾われなかったので、絶対に拾ってやろうと思ってました(笑)

そしてそれと同時に、感想でも書かれていましたがこの小説では Journey through the Decade の歌詞の引用をいくつかしています。

もしお暇がありましたら、カメラを差し出す男のシーンを見るついでに、歌詞のほうにも耳を傾けてみてください。結構、ありますので(笑)

そしてさりげなく、司と戦う直前に士が言った、『通り過ぎずに戦うことを決めた仮面ライダーだ』の部分は、Ride the windからの引用です。

もし気づいた人がいましたら、かなりのディケラーだと思います！

あともう一つ絶対にやりたかったことがありました。

それは何が何でもケータッチのクウガのボタンを押すこと！

押した瞬間に爆発するのではないだろうかと思ってしまうほど、押すことのなかったこのボタン。ムービー大戦2010で使われなかった時点で、絶対に使ってやろうと心に決めていました。

でもここまで小説を書いておいてあれですけど、本当はライダー大戦の小説を書くつもりは初めはありませんでした。

それは以前にも触れたとおり、初めはビギンズナイトの事件中の世界にディケイドが首を突っ込み、それでいろいろとしていく話を考えていましたし。

もしくは時期的に、レイジングミラージュのクリスマス後日談でも書こうかと思っていました。

だけど、あのムービー大戦2010を見てしまったら、もうディケイド主体にしか書けるわけありません！！

これもまた以前書いたことなのですが、一読者として私自身が本編後のライダー大戦を見たいという気持ちが一番強かったですからね。

で、思ったよりもそれをネタにしている人が少なかったので、だったら私が。と言った感じです。

ちなみにずっと言い忘れていましたけど、始まりがエピソードなのは、TV最終回の終わりを意味していて、ラストは新しい物語の始まりを意味しています。

さてさて、どの作品もそうですが、本当にこの小説も思い入れが強いものになりました。

それもこれもこうして読んでくれる読者様がいるからこそです。なかなか一人で黙々と書き続けているだけだと、気が滅入っちゃいますからね。

こうして後書きを書いていると、ドンドン書き遺したことが浮かんできますが、それだとキリがないので、このへんでこの私のライダ―大戦は終幕にしたいと思います。

といいますか、今度は今我がサークルで作ってます同人ゲーム、『また君とこの場所で』の第三章のシナリオ執筆に入らなければいけませんので、休んでる暇は正直ないという罨がw

うちのサークルのサイトを見ていただいた方はわかるかもしれませんが、一応同人ゲームをメインにやっていますので、もしこの小説を読んで、白翼の文章に興味を持っていただいた方は、そちらもプレイしてもらえるとありがたいです。

それに番宣になってしまいましたが、2月14日に東京ビックサイトで行われます、コミュニティにもゲームのほうで参加しますので、どうぞ興味のある方はよろしくお願いいたします。

今年度いっぱいには同人ゲームに集中して、その後は私自身の本当の戦いが始まります。

ですので、多分ここでこうして小説を書くことは、今後なかなか難しいものになると思います。

まあ同じようなことをレイジングミラージユの時にも言っていましたから、何か魂が燃えるようなものに出会えたら、コロツと帰ってくるとは思いますけどねw

そしてこれが本当に最後のお願いです。

前回はそうだったのですが、もしこの小説を読者さまが気に入ってもらえましたら、出来たら感想や、文章評価、レビューなどをしてもらえるとうれしいです。

なかなか図々しい作者ですが、やはり何か得るものがあると、後の活力にもなりますので!!

感想のほうは、こちらの小説を読もう様のサイト以外にも、うちのホームページのほうにも感想を簡単に送れるコンテンツを用意しておきますので、出来ましたら、出来ましたらよろしくお願いいたします!!

もちろんレイジングミラージユのほうもまだまだ、感想募集しますので、そちらも出来ましたらお願いいたします!!

さて、それでは短い間でしたけどご愛読ありがとうございました!!

また皆さんと会える日を楽しみにしています。

ではさ〜 ノシ

HP イノセントウイングス

<http://skyy.geocities.jp/hakuyo>

ku123/index.html

出戻り&告知

注意 これからする告知は二次創作のものではありません。

しかしもし興味がありましたら、御回覧のほうよろしくお願
いします。

はい、そんなわけで段々一年に一度更新になっている白翼です。
ここ最近はずっと一次小説のほうに力を入れてまして、二次創
作のほうがめつきりやらなくなってしまいました。

しかし一次小説を書いている、これはどうだろうかといった作
品も出来てしまいました。

といますか、もうこの一年ほどで何が面白くて、何が面白くな
いのが迷走状態です。

何が言いたいかといいますと、レイジングミラージュと同じです。

作った方がいいが、このままほとんどの人の目に触れずに封印して
しまうのは、あまりにも作品がかわいそうだと思ひまして、今回は
一次作品のほうを投稿することにいたしました。

これだけハードルを下げてあれですけど、もしまだ白翼の文章を
読んでもいいかなという人がもしいましたら。どうか、よろしくお
願ひします。

載っている場所は、同じ小説を読もう内です。

`http://ncode.syosetu.com/novel
view/infotop/ncode/n66270/`

ビギナースクリエイト『初心者の俺たちが、同人ゲームを作ります』

をよろしくお願いします。

それでは今日はこんなところで。では、ノシ

再度出戻り スカルビギンズナイト

そんなわけで、サブタイトルの通り仮面ライダースカルの二次小説を書きました！！

いつもは最新の小説のあとがき後に書くのですが、今回は二次小説と書くことでこちらのほうに書きました！

更新は午後八時ごろを予定しております。

注意点と言えば、小説の初めにも書いてあるのですが。

この小説は映画「仮面ライダー×仮面ライダー オーズ&ダブル feat. スカル MOVIE大戦CORE」の内容を全く反映させていない作品になっております。

そのため

- ・ある人物と他のキャラクターの関係の差異
- ・ 莊吉の (ここには漢字が二文字) が公式と違う
- ・ というか、公式のスカルのビギンズナイトと別物じゃん

というのが気になる方には、少々お見苦しい作品になっています。

特に一番注意してほしいのが次の項目。

・鳴海荘吉は生まれた瞬間からずっとハードボイルドなんだ！だから彼はどんな時だってかっこいいんだ！！

と思われる方には少し辛い作品になっています。

この作品は、荘吉が皆さんの知るハードボイルドな鳴海荘吉になるまでの物語であります。そのため、この作品の荘吉は人間として弱い部分が多々存在します。

もし以下の項目に引つかからなかった方、また引つかかっても読んでもくれる読者様がいましたらどうぞよろしくお願いします。

そんなわけで気が付いたら、ライダー小説もこれで三度目です！！映画でのおやつさんは、かっこよかった。かっこよかったです。少し物語が味気なかったと言う俺と読者様に送ります『ビギンズノゼロ』。もしよろしかったら、最後までよろしくお願いします！！

という形になっています。

それではまた小説のほうでお会いしましょう。

では
ノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2144j/>

仮面ライダーディケイド 第32話 「土」

2011年2月11日16時25分発行